
魔法少女と悪を背負った者

幻想の投影物

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女と悪を背負った者

【Nコード】

N4512Y

【作者名】

幻想の投影物

【あらすじ】

不幸によって振り回された少年がいた。彼は最後まで不幸に囚われその命を落としてしまう。その先にあったのは白い世界。そこで神と出会い、新たな命を歩むと共に、背負うべき力を選択する。そうして『この世全ての悪』となった少年は希望と絶望が渦巻く世界へ訪れたのであった。全てを背負うことを決めた彼に訪れる結末とは…… 物語参考はコミックスです。作者はハッピーエンド主義者です。

不幸・転生（前書き）

もうひとつの方でスランプになりましたので、逃げの一手として書かせていただきます。というかこちらがメインになるかもしれないのでどうかよろしく願います。
マンガをベースに書いています。

不幸・転生

ここは全てが真っ白の部屋。ここにあるのは白い椅子と白い机。その椅子に座ってこちらを見ている老人だけであつた。

「よくぞここまで来た。まあ、座るといい」

そう言つて目の前の老人は着席を促してきた。それに従い素直に座り、老人に向きなおつて言を紡ぐ。

「それで、やっぱり俺は死んだんですかね」

「・・・理解が早い。その通りだと言つておこつ」

やはり想像どおりらしい。だが未練は無いし、残すようなこともしなかつた。生来より人よりも運が悪かつただけ。小さい頃はいつも大きな怪我をしてばかりであつたし、かつあげ等もざらであつた。死因もそれと同じで、運悪く重傷を負い、運悪く病院に着くまでの間に処置が間に合わなかつただけだ。思考の海から浮上したその時、老人が感心したように口を開いた。

「激昂しないのだな、久しぶりに見るパターンだ」

「いや、したところで何が変わる。というわけでもないですし、あなたが悪いわけでもないでしょ——」

「いや、実は私のせいだ。」

「は？」

生前の考え事が吹き飛んだ。いやいや、この人何をおっしゃっているのか？まさか魂を連れていく死神か人の魂を管理する閻魔――

「後者の回答が近いであろうな」

「人の考え事に口はさむのはどうかと、とゆうかやつぱり読めたんですね、心というか頭の中。」

「That's right. ついでに私は『神』だといっておう」

そのたたまいからある程度の予測はしていたが、面と向かって言われるとより一層、目の前の人物が神々しくも見えてくる

「それはともかくあなたがやったと？」

「うむ、それで間違いない」

要するに俺はこの御老公のせいで死んだと……
あるんだなーそんなミス。神様も万能ではないってか

「That's right. あと、君のそうなった原因は管理の時にまれに起こりうるミスでね、『今』の君にあるはずの幸福を入れ忘れ、平均値・2くらいの量で輪廻から送り出してしまったのだよ。」

「はあ。つまり、俺の今までの不幸はそれが原因でもたらされた。先ほどパターンって言うていたということは他にも何人かいて、それでこれを聞くと殴りかかってきた。ということですか」

「先ほどから実に察しがいいな。それで私に掴み掛かるかね？それで君の憂さが晴れるならとことん付き合おう。」

「そんな度胸も趣味もないので遠慮します。で、死んだことはそうとして、こうして話すということはそのまま死んだ先には行けないということですね？」

「ああ。その他にも事があるのでここに留まってもらったが、君に対する謝罪をせねばなるまい。こんな言葉でも受け取ってほしい。

——すまなかった」

「いいですよ。俺が怖かったのは、死んだ先は何も考えられない『無』しかないのか、それともってところだけでしたから」

「なかなか面白いことを考える。普通、その年の頃はもっと楽しむものだとも思うがね」

それからしばらくの間、二人は会話を続けた。内容はこれからの事について。これまでの不幸な人たちはこのままりセットされ輪廻に戻っていくか、記憶を持ったまま輪廻に入るといったもの。

後者はいわゆる『転生』で元々居た世界とは違う法則がある世界に行くというものであり、生きたい世界があるのなら自分で選べるらしい。だが、前者と後者のどちらの場合も蘇ったとき、自分で選んだ特典を持つことができ、その特典の制限はその世界によって変わるが、神に匹敵するほどの力はず、地球全体規模の大災害程度が限界らしい。（十分だと思うが

また、どんな能力であっても、神が思考を読み取り、その力を決定するとのこと。ちなみに、その力を使い世界の運行に危害を加える、もしくは世界を滅ぼそうとすると、この神とは関係なく『世界』自

身からのペナルティがあるようだ。要約すると「この世界に入れてやったんだから勝手に暴れるな」とのこと。世界とて生きているのだから当たり前だとは神の談。

しばらく思考にふけり、出した答えは

「分かりました。『転生』にします」

「あいわかった。特典のほうはどうする?」

「『この世全ての悪』^{アンリ・マユ}でお願いします」

「……アレとて神の一柱、神には近づけぬといったが?」

「いえ、fateというゲームに出てくる聖杯の泥と彼の英霊としてのスペック、加えて俺の考えた追加要素さえあればそれでいいです」

「ふむ、本当に変わった奴だ。今までにはない新しいタイプだよ。どれどれ、……ほう、これはまた面白い。まさに信仰を受け力をつける神、いや畏れを形成し形作る妖怪のような存在が近いかな。承諾しよう。君はその道を歩むことに迷いはないな?」

「ええ決して」

「ならば送ろう。世界はどうする?」

「ランダムでお願いします」

「それらの願いは確かに受け取った。これは定型文だが君にも送っておこうか」

——次なる人生こそ君に多くの幸あらんことを——

これから悪を背負わされる者に言うのも変なことだが、謝罪と一緒に受け取ってくれたまえ。

ではさらばだ。選んだ力とその特性ゆえに、一つどころの世界に留まることは難しい、かつ渡ると同時、その世界にとらわれるという奇妙な現象が起こるため、君の魂はもう輪廻に来ることも無いだろう」

そう言ったと同時に、俺の内面の変化と足元には底の見えぬ大穴があった事に気づいた。

「ああ、言い忘れていたがすでに力はある。魂の進化とも劣化とも取れぬ異例ゆえ年齢の成長は打ち止められているだろうな。」

「りょーかい。俺はオレとして楽しませてもらいますかね…！？グアツ…！」

そう言い残し『悪』となり口調も魂も変わった少年は穴に落ちた瞬間、苦悶の表情を浮かべながらこの白の世界から姿を消した。そこに残されたのは再び神が一人だけ。

「ふむ、本当に面白い。元々が背負わされたモノゆえに、人の負の感情を吸い取り、自らの力へと変え、泥へと還元する能力か、まあ今回の峠を越えた後、あ奴の生きざまを覗いてみるのもよかるうて」

依然と終始変わらぬ口調で神はひとり呟いた。

ふと何かに気付いたようで、感慨深い表情から一変。初めのような無表情になり、姿勢を正し、ある方向を向いてその言を紡ぐ。

「よくぞここまでできた。まあ、座るがいい」

これから神は魂を導き続ける。それがこの神の役割であるのだから。

不幸・転生（後書き）

あいも変わらず短いです。このような文を読んでいただきありがとうございます。

人物・紹介（前書き）

調子に乗って人物紹介です。これだけはこれからも書き続けていこうと思います。

人物・紹介

主人公

アンリ・マユ（この世全ての悪）

特徴

生前は高校生。生まれ持った不幸に嘆きつつも、それを受け入れたのが小学校頃だったので、常にといいわけではないが、何事に対しても冷静思考を巡らせることができる（あくまで思考であって、表情や表現は人並みにしている）。決して某フラグメイカーの様に髪がツンツンしていたり、赤みがかつたりはしていない。そして「不幸だ」とも「なんでさ」とも言わない……かもしれない。

名前は生前の名前を輪廻の際に置いてきたのでそのまま自分が貰った能力『アンリ・マユ』を使用している。身体的特徴はほとんど原作のアヴェンジャーと変わらないが、元々の主人公の容姿をしているため、身長や体重はそれに準じたものとなっている。性格そのものは元の人格がベースのため、一般人と何ら変わらない感性だが、戦いや殺人、残虐な行いに対しても気分が高揚する一面が追加されている。加えて口調など、一人称が『俺』から『オレ』になるなど、いくらかの変化はあるようだ。

能力

前の話で神様が言ったことと同じ。基本スペックは『英霊アンリ・マユ』だが、聖杯からあふれた魔力と悪意の塊の『泥』や彼自身がつけた能力のうちの一つに『人の悪意や負の感情を他人から回収し、自身の一部である泥へと変化させる』という能力がある。神の言った通り、人々の『悪意』を『信仰』や『畏れ』のような祈りへ変え、己を保つとともに自分自身の魔力限界量（要はMP）を底上げして

いるため、かなりの長時間の使用をしない限り、実質上の『魔力切れ』の現象が起きない。

他にも、原作 Fate の似非神父のように泥を投げつけたり、真つ黒に染まった後輩のように鞭や人型として使ったり、更にはその泥に乗ることで空中戦闘をも可能にした。

ちなみに、ホロウの『繰り返しの四日間』に出現する『無限の残骸』

アンリミテッド・レイズ・デッド

もこの泥を宝具として再現可能であるため、一対多数や諜報活動、身代わり等の時は重宝できるが、泥自体が（本人がなるべく抑えているとはいえ）悪意と魔力の塊なので案外容易に発見される。パロメータは神の加護もあり（悪が神の加護を受けるというのもおかしい話だが）、基本的に原作よりいくらかの上昇をしたため、低々中程度のランクの英霊とならば渡り合えるだろう強さとなっている。泥そのものは地面から染み出てきたり、虚空から現れるので奇襲にも有効である。

ステータス

クラス：アヴェンジャー

真名：アンリ・マユ

性別・年齢：男・17 18（外見年齢）

属性：虚無

身長：174 cm

体重：59 kg

パラメータ：（ ）内は泥でブーストもしくは何らかの方法で強化時

筋力・D（C+）

耐久・E（D+）

俊敏・C（B+）

魔力・B -（EX ∞）

幸運・C

宝具・D B+

クラススキル

無し

保有スキル

対魔力：D

一工程による魔術を無効化する。効果としては魔除けの護符程度。まどマギで換算すると強化した契約前さやか魔法コーティングバツトをノーダメージで防げる程度。

殺害権限：ー

人類に対する絶対殺害権限。英霊クラスの超人であろうと、魂のあり方が人間である限りアンリ・マユには勝てない。しかし、本当の『英霊』や『人外』が相手の場合、勝つことは難しくなるだろう。ランクがないのはこれを保有する『英霊』が他にいないので、彼だけの神秘の独占により神秘性が向上しているから。

聖杯：EX

聖杯とつながりがあると付属されるスキル。召喚後の現界維持だけでなく、その他の魔力も聖杯からのバックアップを受けることができる。ランクによって受ける恩恵（魔力）が増減し、一時は聖杯そのものであった事に加え、常に壊れた聖杯を所持しているような状態なので、魔力を消費する行動すべての恩恵を受けることができる。

神性：C+（A+）

元は悪神であり、本来は最大の神霊適性を保有するのだが、彼自身は背負わされたに人間に過ぎない。だが、魂を管理するほどの神格者と魂が触れ合ったことにより、いくらかの適性を得た。

単独行動：ー

マスターからの魔力が絶たれても現界していられる能力。ランクがないのは、上記のとおり聖杯（泥と悪意）からの無限のバックア

ツプによって魔力が尽きることがないため。

今後の作品で追加あり

宝具

ヴェルグ・アヴェエスター

『偽り写し記す万象』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：1人

由来：ゾロアスター教経典「アヴェエスター」の写本

「報復」という原初の呪い。

自分の傷を、傷を負わせた相手の魂に写し共有する。仮に右腕がなくなつた場合にこの宝具を使うと、相手の右腕が同様に吹き飛ぶことはないが、感覚がなくなり、動かすことも出来なくなる。条件さえ満たせば、全ての相手に適用できる。高い魔術耐性を持つサーヴァントであつても問答無用である。

しかし、発動は対象一人に対して一度きり、放つのは自動ではなく任意発動。軽症ならばさして障害に出来ず、かつ今後同じ相手には使えなくなり、一方、致命傷では死亡してしまうため使うことができない。使いどころが非常に難しい上、互いに重傷を負つて動けないという困つた状況が出来る。本家アヴェンジャー曰く「傷を負わねば攻撃できない、クソツタレの三流宝具」。

なのだが、神が手を加えたので一人に対して何度も使用可能という利点を得た。ランクやその他は上記の三流より推測したもの

アヴェエスター

『遍く示し記す万象』

ランク：不明 種別：対界宝具(?) レンジ：? 最大補足：?

由来：不明

起きた出来事を自動的に記録していく宝具。

言葉にならない感情や、本人も気付いていない感情をも言葉として記録する事を可能とする。その名に相応しい、何者も傷つけない宝具。戦闘には一切使うことが出来ない。

「偽り写し示す万象」はいわばこの宝具の贗作のような物。

これは神が仕込んだ記録用の宝具であり、アンリ本人はこの宝具を知らないし、使えない。本当に単なる記録媒体。

アンリ・ミッド・レイズ・デッド
『無限の残骸』

ランク：B + 種別：対人（自身）宝具 レンジ：1 最大捕捉：1人

由来：不明

もとは『繰り返しの日日間』で出現したアヴェンジャー本人の残骸だったのだが、このたびは宝具として昇華された。聖杯の泥を形成し、疑似的なサーヴァント（分身）を造り出す能力である。

ランクは Fate / Zero のアサシンから拝借。アサシンと違いその形と色はどのようにでも出来るのだが、上記のとおり元々が『人の悪意や負の感情』で出来ているので諜報にはあまり向かず、常に負のオーラを撒き散らしているので、アンリ本人を知る人なら気配で気付かれることもある。

燃費が悪く、使用した分だけ泥の量は減り、戦闘終了後に残った泥は全ての悪意を行使者に押し付け、構成する魔力は空气中に霧散する。現段階では、泥が一日に1000?溜まるとすると、1時間の使用量は100リットルと言った具合に、所有者に厳しい欠陥宝具。この宝具は常時発動しているようなもので、アンリ本人が無意識下で『アンリ・マユ』の形を造っている。ただ本人を形作る泥は元々の人間の体がベースとなっており、悪意を撒き散らすことはないの、彼自身と対峙しても、悪意にさらされることはないだろう。オリ宝具その一

『この世の全ての悪背負わされし者』
アンリ・マユ

ランク：D 種別：対人宝具 レンジ：無し 最大捕捉：保有者と同じ惑星に存在する全人類

由来：無し

主人公が『この世全ての悪』となる時に神に頼んだ「加えたい能力」が宝具となっている。最大捕捉人数からわかるように地球に生きる全ての人たちの悪意や負の感情といった人間の負の面を際限なく吸収し、魔力と泥へ変える宝具である。

これも無意識下での常時発動型の宝具であり、『この世』の『人間』すべての負を対象とし、負を魔力へと変換する宝具である。意図して一定の対象からの負を吸い上げることでも可能。

欠点として、無意識下なのは魔力の『貯蓄時』であり『使用時』は意識的にせねばならない上、使った分だけの人間の負の感情が魔力とともに使用者に流れ込んでくるという欠陥も併せ持つ。どんな状況であろうがそれを止めることはできないので、これもまた「クソツタレ」宝具の一つといえよう。だがこの宝具により、事実上は無限の魔力を保有している。

ランクが低いのはあくまで対象が『人間』限定であるためと、元々伝承として残されたわけでもなく、歴史が無く神秘性が低いため。ちなみにこの泥の魔力はアンリ以外は使用できない。（悪意に吞まれ廃人になるからでもある。）

もしも、『このアンリ・マユ』が伝承として綴られ、歴史家に紐解かれるようになるまでの年月と伝説を残せばランクが上昇し、今以上の高率で魔力泥に変換できるであろう。

二つ目の条件としては彼自身が一定以上の人間に信仰されるようなことになれば、信仰と神性スキルと共にランクが上がる。なお、最高ランクはBである。

例・・・現段階：一日1000？ ランクC：一日5000？ ランクB：一日10000（リットル表記はあくまで一例。実際はもっと多い。

オリ宝具その2

『????』

ランク：？ 種別：??? レンジ：??? 最大補足：???人

由来：？？？

全てが謎に包まれた宝具。本来の形は当然存在するが、誰もその形を知らない。

そもそも宝具と呼べるかどうか怪しいシロモノで所有者が真の祈りを捧げると発動するが、アンリはこの宝具のことを一切知らないし、感じ取することもできない。

サブキャラクター

神

特徴

言わずと知れた魂の管理者。輪廻する魂を延々と浄化と回収を繰り返し、送り出している。神といえど、彼（？）一人でそれらの『作業』をおこなっているのが、当然何年かに一度のミスがある。が、この作品の主人公の様に不幸だったり、ミスした人間には死後、その魂を自室に連れてきて念入りに『転生』させる。主人公の後に来た人物がいたようだが、本編には何のかわりもないのでご注意を。

作中には登場しないが、他の神やその眷族からはその役割上「管理人さん」とさん付けで呼ばれるほどの人気（？）をもつ。その世界では割と有名神のようである。

地の文だけに止まるが、後々出番はあるかもしれない。

能力

基本、人の魂の管理という大きな仕事に就いているので、『万能』といっても差し支えないほどの力を持っている。あくまで『力』なのでミスもあるが、それをこの能力で補うことができる「使い勝手のいい能力」とは本人の談。浄化を行わず、送り出す『被害者』た

ちに能力をつけるのもこれを使用している。

『被害者』たちが浄化を行わずとも再び送り出すことができるのは、ミスをした場合は魂の中身に空きができるので、「その空き容量に記憶と人格を突っ込み、他の部分を浄化したと同時に能力を授ける」という力技ながらも繊細極まりない方法を使っているため。

ちなみに『被害者』と会話をしている際も並列思考で次々と魂の管理をしているので、ゆっくり話すことに管理の弊害はない。むしろ人間と話をすることができるので、新たな刺激にはちょうどいいとも考えている節がある。だからといって罪の意識がないというわけではない。

人物・紹介（後書き）

妄想全開で主人公設定です。偽り写し記す万象は公式から拝借し、
ランクと効果範囲は想像です。

宝具と保有スキルが多すぎるかもしれませんが、この程度がちょうどいいかとも思っていますので、どうかご容赦を。

今回も来てくださった方にはありがとうございます。初めて来た方もこのような自己満足の小説をお楽しみいただけたらと思います。

追記：2011/11/20 身長・体重変更 163cm↓174cm
54kg↓59kg 宝具：??? 追加

2011/11/28 宝具『この世の全ての悪背負われし者』ランク向上条件追加

生贄・悪神・召喚（前書き）

時系列は原作開始3年前あたりです。

痛みは、苦しみは、憎しみはまだ終わらない。だが気絶することも死ぬことも許されない。それでも自己を『保たされて』、延々と堕ち続けてきた彼は、いつのまにやら。ただの肉塊から人の形へと近づいていた。

「ヅウあッ！ゴオエエエ！！」

とどめと言わんばかりに『右眼』と『咽喉』を貫かれたような今までは比べ物にならないほどの痛み。それを最後に、儀式は終了した。ついに意識を手放した彼は、世界の間の中を堕ち続けるのであった。

あれから何時間。いや何日・何月もの日がたったのだろうか？

『この世全ての悪』となる儀式を終え、自我と理性を取り戻した彼・いや、アンリ・マユはいい加減、堕ち続けるこの状況に飽き飽きしていた。

「オレの受け入れ先ってどんな所かねえ？さっさと自分の足で歩きたいんですけど！」

訂正。少しばかりキレていた。それも仕方がないだろう。これまでの間、彼は自分の能力の確認と実証を繰り返し、完全に使いこなせるようになるまで、時間を使いつぶしたのだから。……まあそれを以ってしても世界の壁を越えることはできなかったのだが。

はたから見ると危ない人の様にブツブツと一人、愚痴り始めた彼は

今やただの肉塊から立派な人の形をしていた。

ボサボサの黒い髪に、額には赤い布のバンダナ上半身は裸同然であり、腕には黒い包帯のようなものを手の甲から肘のあたりにかけて巻いている。足にも同じものがあり、こちらは踵を除いて脛すねから足の甲にかけてだ。ぼろ衣を腰布として使っているように深紅の布が巻かれ、その下には原作と違い、しっかりと赤い布の下着をはいている。その全身には呪いの印である黒と赤の模様がのたうちまわるように描かれていた。

望み通り、サーヴァント『アンリ・マユ』としての彼がそこに居た。それはともかく、相変わらず堕ち続けていることには変わらないが。

「・・・んん？何だこりゃ。なーんか引つ張られるような感覚。まさか！召喚か？」

その予想は当たりである。彼を受け入れる世界にようやくたどり着いたのだ。なにかに引つ張られるような感覚は、世界そのものの、魔力を持った人物が彼を召喚したことに他ならない。

期待で興奮しながら待つ、彼の居た世界にひびが入る。

ピシィ！パキツと音を響かせながら世界が開き、彼にとっては久しい地球の景色が

——無かった。

「ハア？」

そこに在ったのは全てがねじ曲がったような空間。ドロドロとした空気は人を不快にさせ、そこに存在する物は見るだけで嫌悪感を呼ぶような形状をしている。だが、ここに入ったその瞬間、彼に負の感情が流れ込み、自身の泥の絶対量が増加したのを感じた。

「なるほど。人間の負の感情をそのまま世界として創られてやがる。

『固有結界』みたいなもんか」

『固有結界』それは展開した本人の心情風景を現実へ侵食する『大禁呪』のことである。彼が一人納得を浮かべると、その世界に不釣り合いな明るい感覚を感じた。

それはマスコット銃と呼ばれる武器を携えた少女で、その少女にはあまりにも不釣り合いなほどの大きさの砲身には、これでもかというほどの魔力が感じられる。

彼女の銃口はその眼前に存在する大きな目玉に直接、髪と口がはりついたようなグロテスクな外見をしていて、その眼球からはその少女がやったのか、毒々しい色に染まった血が流れている。

「ティロ・」

一段と砲身の魔力が高まった。どうやら必殺技を打つようだ。

——その時、彼女の後ろに小さな影が浮き上がる。彼女は眼前の化け物に神経を注いでいて、気付いていないようだ。それを見た瞬間、彼は獣となって駆け出した。

「フィナーレ！」

大爆発。煙が晴れるとあの化け物はいなくなり、黒い卵のようなものが残っていた。だが、彼女の後ろに在った影が実体を持ち、腕だけの化け物とその掌にある鋭い歯を覗かせて襲いかかる・・・！

「え？」

悪寒に気付いて振り返った少女は心底不思議そうな声を上げる。目の前には大口を開け、その歯で切り裂かんとする化け物とその瞳に映っていた。

だが、時既に遅し。銃を取り出すスペースも時間も彼女には不足していた。あわやその手が少女を亡きものにせんとした瞬間。

「シャツハア！！」

ズシャアッ！と肉の裂かれる音と共に、眼前の化け物がその距離わずか数センチというところで真つ二つにされた。切り裂かれた化け物は面に受ける空気抵抗に従い、少女の両脇をすり抜けながら力なく地面へと落下し消滅した。

その場にへたりこみ、化け物を切り裂いた人物をただ、茫然と見上げる。

化け物を切ったと思える、歪な形をした逆手の短剣を両手に持つその『男』は、少女に笑いかけながらこう言った。

「お嬢ちゃん、アンタがオレの『マスター』かい？」

そこまでが限界だったのだろう。今まで溜まった恐怖が体を巡り、なぜか心に残った掛けられた言葉の意味を疑問に感じ、少女は意識を手放した。

「う……ん」

少女が目を覚ましたその場所は自身がよく知る場所、自室のベッドの上だった。

「よう、目え覚めたかい？」

聞いたことがある声色に気付き反射的にその方向を見る。

「混乱してつとこ悪いが、パスも繋がってる。どうやら嬢ちゃんがオレを喚んだらしい」

パス？喚んだ？状況が分からず、初対面の男の前で首をかしげる。そこでようやく本来の意識を取り戻した少女が投げかけた言葉は疑問だった。

「あなた、誰なの！？何で使い魔を倒せたの？どうして私の家を知っているの？こたえなさい！」

「オーケー、オーケー答えっからちよいと落ち着け、な？ほら深呼吸。吸ってー吐いてー吸ってー吐いてー」

思わず言われた通りに深呼吸をする少女。その目はいくらか落ち着きを取り戻し、理性的な光が灯った。いつの間にか黄色い宝石を胸のあたりに携え、再び問う。

「ごめんなさい。私としたことが取り乱してしまったようね。それで、改めて聞いわ。あなたは誰？使い魔をどうやって倒したの？私の家を知った理由とどうして私を運んだのかを答えなさい」

「うわ、質問増えてるし」

「いいから答えなさい」

「へいへい、そんじゃ一つ目。」

オレはサーヴァント。クラス名はアヴェンジャー。あんたが召喚し

た英霊って存在だ。これは肩書きで真名は別にある。・・・おいおいそう睨むなもうちょい冷静になってから教えるって。

気を取り直して二つ目、さっき言ったようにオレは英霊だ英雄が化けモン一匹倒せん通りもねえだろ。

三つ目はしばらくしたらきた真っ白なしやべる小動物に聞いた。まあ、家聞いたら答えてすぐどっかに消えたが。

んで最後、アンタを運んだのはあんたがオレのマスターだからだ」

素直に答えた男にも驚いたが、中にも驚愕に値する単語が入っていた。『サーヴァント・アヴェンジャー』『英霊・英雄』そして『マスター』。英雄の部分は理解できるが、英『霊』であつたり、そんな存在を自分が『召喚』したことであつたり疑問は尽きなかった。が、仮にも自分の事をマスター（主）と呼ぶのだから答えるだろうと思い、警戒を続けながらも、さらに問いを投げかけてみた。

「聞きなれない単語が多くて、少し混乱していたみたいね。私がマスターというのなら答えなさい。詳細にあなたの正体と英霊、それからマスターについて」

「マスターとしての命令ならそうしますかね。んじゃ、よく聞いてくださいな」

おどけたようなしぐさをしたのち、真剣な表情に切り替わり、一呼吸を置いてアヴェンジャーは話し始めた。

「英霊ってのは生前、その功績をたたえられた人物が伝承となつて『英霊の座』ってどこに登録された奴の事だ。一口に英霊といつても純英霊と反英霊がいる。前者は名の通り正義だかヒーローだか呼ばれる奴らだ。後者はその逆、ヒーローと相対した悪だつたり退治された化け物だつたりするものもある。そういった奴らを『英霊の座』

から魂をコピーして大量の魔力の塊『エーテル体』で構成された最上位の使い魔の事だ。

大抵、英霊は宝具っていう必殺アイテムを持ってる。『アーサー王ならエクスカリバー』、『クー・フリーンならゲイ・ボルグ』って具合にな。

それから、オレ自身は反英霊に属している。まあ英霊のなかでもオレに負けるような雑魚はいないってぐらいの『最弱の英霊』だがな。大抵英霊が召喚されるような事態は『聖杯戦争』か『人類の危機の殲滅』の二つだが、今回はイレギュラーな召喚だと言つところ。

んで、『マスター』ってのはあんたが思った通りの存在。つまりは英霊の召喚主であり、主様だ。この権限が必要なのはさっき言った『聖杯戦争』でな、名前の通り『聖杯』っていうなんでも願いをかなえることができる御都合満載の杯を取り合う二人一組のマスターとサーヴァント七組の殺し合いだ。

聖杯は最後に残った一組を認め、その前に姿を現す。さっきイレギュラーだったのはこのことだな。その戦争にマスターの体のどっかに英霊つつー規格外の存在を縛り付ける絶対命令権『令呪』が現れるんだ。だが、聖杯もねえのにあんたの左肩に令呪があったから、イレギュラーながらもあんたがオレの主ってわけ」

少女はそれを聞き、幸い半袖だった左肩の服をまくってみると『逆月に二本の絡み合った線があり、それを囲むように円が描かれている模様』確認し、息をのんだ。

「見つけたみたいだから話を進めっぞ。その令呪は三回まででな、最後の一回を使うと英霊はマスターからの魔力供給を離れ、徐々に魔力をなくして消滅し、座にもどる。

ま、魔力は心配スナ。オレを喚んだことにいくら使ったみてえだが、オレの宝具のおかげで魔力の供給はいらねえし、オレ単品で行動できる。

最後にオレがいる利点についてはさつきみてえな化けモンとの戦闘の手助け、それからただ離れてても、その令呪から繋がったパスを通しての距離が関係ない念話ぐらいだ。」

そう言い括り彼は沈黙した。・・・もつともにやけ笑いをしながら、だが。

沈黙が続き数分、彼女は意を決して口を開いた。

「自己紹介をしましょう」

「・・・ハ？」

啞然。アヴェンジャーの表情はそれに尽きた。だが少女は構わずまくしたてる。

「あなたは反英雄といったけど、キュウベえもあなたに私の家を教えたということは悪い人じゃないみたいだしね。

私の名前は『バマミ』。ここ、見滝原町の平穏を守る『正義』の『魔法少女』よ。これからよろしくね？アヴェンジャー」

「クツ・・・ハハハハハッハッハッハッハッハッ！ああー面白え！久しぶりに馬鹿笑いさせてもらったもんだ！」

突如、大声で笑い出したアヴェンジャー。その奇行に、名を名乗った黄色の少女、バマミはその職業柄、人とあまり触れ合わないゆえ、なにがいけなかったのか判らず慌てだす。

そのコメディちつくな場面は続き、笑い終えたアヴェンジャーは挑戦的な笑みを浮かべ言葉を返した。

「たしかにそうだ！まずは名前の交換がマスターとサーヴァントの

契約。ならば名乗ろう

オレの真名は『アンリ・マユ（この世全ての悪）』。

——ここに契約は完了した。これよりこの身はアンタの盾となり、剣となるう。

クソ古い悪神を背負っただけの雑魚だが、それでもいいなら。オレはアンタにつき従おう！」

そうしてその夜、一組の奇妙な主従が生まれた。

方や人を守り、『希望』を導く正義の魔法少女。

方や人に怨まれ、『この世全ての悪』を背負う反英雄。

彼らがこれから紡ぎだす物語は一体どう転ぶのか？救いが存在しなかった『絶望』の世界に異物の『悪』が紛れ込み、『舞台装置』の歯車もまた、動き出す。

生贄・悪神・召喚（後書き）

マミさんの口調が合ってるか心配です。原作ちらちら資料ちらちら見ながら書いてるのであんまり矛盾はない・・・はず！あってもご都合のタグで打ち消せるといいなあ。キュウベえさんは様子見のため姿を隠しました。

とにかく今回もありがとうございました。

魔・世界・魔法少女（前書き）

説明編、紹介編はここで終わります。

今回、あの名台詞を勝手に改造しました。すいません

魔・世界・魔法少女

「魔術に聖杯・・・ねえ」

「魔法少女に魔女・・・ってか」

「にわかには信じられないけど、あまり意味はないようだ。その結果が地球の科学と同じなら、その程度のエネルギーじゃ宇宙は救えないよ」

あの夜から一夜明けた。

その日の午後、マミが小学校から帰ってきてから、情報交換として各々の世界の『特殊な事情』を互いに話し合った。

誰もアンリの服装に突っ込まないのは御愛嬌である。

アヴェンジャーが魔術についてこんな簡単に話したのは、キュウベえという存在が居たからでもある。帰ってきたマミの方に乗っていた白い生物。もといキュウベえが言うには、もしこの世界に魔術の歴史があつたなら、自分たちがすでに発見し、その理論について研究が何かを進めてあるはず。と言ったからだ。

その考えをまとめるようにキュウベえが口（？）を開いた。

「とにかく、君の言う『聖杯』があるならともかく、魔術じゃ宇宙の延命はできない。男の君が魔力を持っていたりと中々興味深い話だけど、僕はこのあたりでお暇するよ」

「あつ、おい！魔術にはまだ続きが・・・って行っちゃったよアイツ」

アヴェンジャー改めアンリが引き留めようとするも、その願いもむ

なく、キュウベえは姿を消した。どうやら他の魔法少女の候補を探しに行ったようだ。

ちなみに彼が引き留めたのは、キュウベえに魔術について話したことは『科学で再現できることは魔力を使ったものと手順は違えど同じ結果として現れる』ぐらいのものであり、『魔術回路』や『サーヴァント』、『』について等は全く話していない。・・・もつとも『回路』と『』については誰にも話す気はないのだが。

「キュウベえには後で私が話しておくわ。それでアンリ、こちらの魔法少女についてはこれで全部話したと思うけど、魔術の続きって？」

「ん？ああ、さっきあいつが言ってたエントロピーをも覆すかもしれないってのが、オレのいう『魔法』だって言いたかったんだが、・・・アイツも気が早いもんだ」

「魔法？魔術と何が違うのかしら」

「よく言われる言葉ベスト3のトップをよくぞ聞いてくれましたって。それはともかく、魔法はさっき言った魔術と違って『ただ借金と時間をかけても科学では結果をもたらすことができない』っていう反則の塊でバカげたシロモノだ」

「ふーん、アンリはどんなものがあるか知っているの？」

「つつても全部の説明はできねえんだけどな。全部で5つあって・・・えーと

第一魔法は『無の否定』。実際のところ知らん。使い手はすでに死んでるらしい。

第二魔法は『並行世界の運用』。ゼルレッチつつ爺さんが使える

んだが、よくわからん。

第三魔法が『魂の物質化』。死んだ人を蘇らせることもできるらしい。不老不死の足掛かりにもなるって聞いて聞いたことがある。

第四魔法なんだが、これ本当に誰も知らないんだよなー

最後に第五魔法で『青』。詳細マジで不明。使える奴は青崎青子って女で、歩いた後にはペンペン草一本生えないとかゆう物騒な噂しかないから、『破壊』に関するかもって噂もある」

あいも変わらずの長話。まだ小学生だというマミに聞かせるのも難しい単語が多く、普通なら首をかしげるであろうそれを、マミは少々特殊な生い立ちゆえに積み上げてきた知識を使い、アンリの話真剣に聞き入っていた。

「確かにとんでもないものばかりね。それじゃ本当に魔法よ。私たちのとは全然違うのね」

「だからこそ、魔術師たちも魔法って呼んでるんだがな」

呆れながらも二人して同意する。アンリはその魔法にも再現できなかった世界そのものからの移動をどうやって果たしたのか。と考えるまでの思考には行き着かなかったのが、まだ幼いゆえだろうと思いい、魔法についてを話していたその内心で、ここにいる理由を聞かれずホッと息をつく。いざとなれば令呪があるからだ。

だが突然、思い出したかのようにマミは話を切り出してきた。

「そう言えばアンリは反英雄って言っていたわよね？昨日の時の自己紹介で悪とか神様とか言っていたけど、どこの英霊なのかしら」

どうやらアンリ・マユについては知らないようだ。

確かに、いくら知識をつけようと、それは大人の様に自分ひとりで

何でもこなせるようになるためであり、ゾロアスター教などはその宗教の人には悪いが、日本人にとって雑学の域といっても過言ではない。

キユウベえはアンリ・マユの名称からその正体をすでに一部は看破できていたようだったが、マミは知らない。説明が面倒だと思った矢先、いい方法をアンリは思いついた。

「あ、そうだ。マスター。チョイと目をつむってから、オレに集中してみてください」

「え？ええ・・・」

いぶかしみながらも言われた通りに目をつむり、アンリに意識を向けてみる。

「あら？なにかしら、これ。頭の中に表が・・・」

「そいつがオレの能力を現すパロメータだ。真名がわかってるなら説明もわかなだろ」

どこか投げやりに説明をするアンリ。彼とて多少は疲れたようだ。マミの頭にはこんなものが映っていた。

クラス：アヴェンジャー

真名：アンリ・マユ

性別：男性

属性：虚無

身長：160 165cm

体重：52 54kg

パラメータ：（ ）内は何らかの方法で強化時

筋力・D (C +)
耐久・E (D +)
俊敏・C (B +)
魔力・B - (E X ∞)
幸運・C
宝具・D B +
クラススキル：アヴェンジャー
無し
保有スキル
対魔力：D
一工程による魔術を無効化する。効果としては魔除けの護符程度。

殺害権限：ー

聖杯：E X

神性：C + (A +)

単独行動：ー

宝具

（詳しくは人物・紹介にて）

両者ともに静かになった。マミはこのステータスを読み取るのに集中しているようである。
対するアンリは喋り疲れたとも取れる表情をし、己がマスターの集中を乱さぬよう静かにその場から退室。何か時間をつぶせることが

ないかを探しにリビングへ向かった。

時は流れ、外はすっかり日が落ちている。マミの片手には辞書があり、読めない字や意味はそれで何とか読んでいるらしい。

だが、その近くにアンリはいなかった。彼は台所でマミの夕飯を作っていたからである。マミの好物を知らないのも、マミでも食べそうなものを、と考え生前の家事スキルを発揮し、簡素に栄養バランスのとれた晩飯を作っていた。

・・・余談だが、恰好は英霊時の服装そのままである。

とりあえずは完成したので、いったん食事をとらせようと思い、パロメータの読み取り作業を中断させるためマミの部屋に呼びに行った。

アンリが部屋に入った瞬間、何かが腹のあたりに飛び込んできた。耐久がEのアンリは「ウグッ」とむせながら、ぶつかってきたマミに目を移した。

「どうして最初に言ってくれなかったのよ！あなたは何も悪くないじゃない！あんなふざけて理由で殺されて、それで・・・それでえ・・・！」

突然のことで驚いたが、マミからかなりの悲しみと怒りを感じる。ステータス内のプロフィールにある『このアンリ・マユ』の生い立ちを見て、これほど感情的になってまで自分を心配してくれたようだ。

何故かは知らないが、マミから発せられる悲しみや怒りといった負の感情が異様に多いので、宝具の効果を集中させながら彼女からの穢れを吸収する。

そうして泣きやむまでの間、子供を諭すように頭をなで、アンリは

こう言った。

「別にマスターがそこまで悲しむ必要もねえだろうさ。すでに死にしまったもんはしょうがねえし、オレはここに『いる』ってだけで十分だ。

それによマスター、オレはアンタと出会えてよかったと思ってるし、そのおかげであの世界の狭間を彷徨い続けなくて済んだ。だからそう泣かないでくれよ。アンタは一人のヒトを助けた凄い人間なんだからぜ？」

彼の二度目の生は所詮、借り物の力と命だ。ここに存在することができるのはマミがこの世界に召喚よんだからであり、それが無ければこの場所にはいない。加え、このように他人の理不尽に嘆く事が出来る優しいマスターだからこそ、彼もこの居場所を持つことができたのだ。

泣きじゃくるマミの顔を、食事に使わせようと思い持っていた手拭いで拭きとる。

「ああつと、それとずいぶん集中してたようだから晩飯さ。簡単なものだが作つといた。

いろいろ聞いて、今みたいに泣いて疲れただろ？マスターは飯食って風呂入って十分に英気を養つといてくれ。

明日つからまた魔女退治はじめるんだろ、オレもついてくからよ。な？」

「・・・ええ、ありがとう。アンリ」

まだ涙目ながらもアンリの励ましでいくらか調子を取り戻し、気丈にふるまうマミ。アンリはその手を引いてダイニングへと連れて行ったのであった。

夕飯の後、いつの間にかキュウベえも姿を現し、いつものマミの自室にて明日以降の予定を二人＋一匹で話し合っていた。

「さつきはありがとう。こっちが逆に慰めて貰っちゃたわね」

「いんや、マスターの管理も従者の役目サーヴァントさね。そう気にすんな」

「？僕がいない間に何かあったのかい」

「いや別に」

「まったく、わけがわからないよ」

そして二人は笑い始めた。昨夜の様なものではなく、ただ純粹な可笑しさとして、ただ一匹、キュウベえは理解できないようだ。

「昨日魔女が倒されたわけだし、私のソウルジェムにも反応がなかったから今日は大丈夫だったけど、明日からまた探索を始めよう。ちようと学校も土日の休日だし、アンの戦いを一度ちゃんと見ておきたいしね」

「了解だマスター。オレも「ああ、そうだ！」・・・どうした？マスター」

「それよ、その『マスター』って呼び方。私のほうが年下だし、こ

れから名前で呼んでくれるかしら」

「へいへい、そんなやマミと・・・ああ、やっぱこっちのが呼びやすい今度からそう呼ぶさ。それと、言いかけたが明日は『霊体化』してついてくから人目は大丈夫だ」

「霊体化？そんな魔術があるのかい？」

「いいえ、サーヴァントの能力の一つらしいわ。他にもアンリから色々聞いたけど・・・やっぱリキュウベえには秘密にしておこうかしら」

「へえ。地球こくの科学でまだできないことのようにだけど・・・まあ魔術にあまり期待していなかったからね。別にいいさ。明日、アンリが能力を使うときがあるなら、その時にまた来るよ。じゃあねマミ、アンリ」

そう言うのと例のごとく、キュウベえは夜の闇にまぎれ溶け込んでいった。

（ん？そっぴやアイツ、負の感情が全く感じられなかった。常にポジティブ思考の持ち主なのか？いや……）

吸収できるのは『人』の負の面だけだが、その性質上、人の感情にも敏感なアンリは見るたびにキュウベえが怪しく見えてくるのだが、気の迷いだと思いを払う。その時

「明日、戦いがあつたらアンリのバックアップは任せて。絶対に守るから」

マミが決意のこもった瞳をこちらに向け、話しかけてきた。それに
対しアンリは

「むしろマミを守んのがサーヴァントの役目だ。そっちの支援なん
ざいらねえぐらいあつという間に勝つちまうからそっちこそ覚悟し
とけよ？」

と、いつものニヤケ顔で勝ち誇るように宣言した。それに答えるよ
うに会釈をし、眠りに入るマミ。アンリは霊体化し、屋根の上に移
動して己がマスターの家を荒らそうとするふとどきものがないか
警戒に入るのであった。だが、アンリが最強なのはあくまで人間に
対してであつて、人外には最弱のはず。それでも勝つといったのは
マミの信頼に対する意気込みだろう。

虫の音が響く夏の夜、『この世全ての悪』を受け入れた見滝原町の
運命は僅かに狂いながらも回り続ける。

初陣の時は————近い

魔・世界・魔法少女（後書き）

なんかやっちゃいました。マミさんってここまで感情的だったか？という疑問もありますし、いくら親がいらないからといって魔術を俺解釈で聞かせるのもどうかと。って投稿してから思いました。皆さんでイメージが壊れてしまったという方がいらしたら、誠に申し訳ございません。

それでは、次回でついにアンリがともに戦います。彼はどんな戦いを魅せるのか、作者にもわかりません。

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。

夢見・宝具・潔癖・初陣（前書き）

オリジナル魔女出しました。原作始まる前にはまた、キャラクター紹介入れるつもりなので、そこで解説はしておきます。

夢見・宝具・潔癖・初陣

高速道路……だろうか。何台もの自動車が押し合い、潰れ合い、横転している。どのフロントガラスにも赤い液体が飛び散り、それを流す人々は皆が痛みと恐怖で顔が歪んでいた。その中には、前方席を上から押しつぶし、他の車に乗られた一台の車がある。

そこで視点は変わり、中にいる人物かららしく、景色がかすんでいく。その外には白が特徴的な不思議な生物がこちらを見ていた。唐突に頭の中に声が響く。

<君の願いは？>

すがれるものが見つかったからだろうか、その視界からは左手が白い生き物に向かって求めるように伸ばされる。その人物の願いは決まっていた。

<助けて……>

視界は暗転し、意識が浮上する。

「……………はっ!？」

夢を見ていた様だ。赤と黒の特徴的な男——アンリは、目を覚まし思考にふける。

(やっべえ、今のって多分ママの……)

そこまで考え頭を振り、思考を放棄した。そして思考を切り替え、急ぎマミの元へ向かう。

あの『夢』はパスを通じ、マスターとサーヴァントがそれぞれの記憶の一部を垣間見る現象であり、Fateの遠坂凜と衛宮士郎も体感していたものと同質であろう。マミからの記憶が『契約』したときの光景だとする。ともなれば、マミは自分が『力を授かった』時の光景を夢で見た可能性がある。いくらグロテスクな魔女との戦いに慣れていても、あの光景はさすがにまずい。そうこう考えるうちにマミの部屋までたどり着いた。

「マミ！大丈夫か！」

ボタン！と勢いよく扉を開けた先に居たのは――

「ひゃあ！ど、どうしたの？アンリ？」

いきなりのアンリの登場により驚愕で腰が抜けたマミがいた。主の無事を確認でき、安堵の息を吐くアンリだった。

なんやかんやあって朝食後の午前9時――

「なるほどね。近くに魔女でも出たのかと思ったけど、そういうことだったの」

「朝っぱらからアホな勘違いでバカ騒ぎしてすまんかった！」

そこには日本の誇る謝罪方法『土下座』で頭を下げるアンリの姿があった。

「それにしても契約のパスによる記憶の流出か・・・私が見たのはそちらの魔術についてが少しあったわ。でも、アンリはやっぱりあの時を見ちゃったのね？」

「・・・ああ。」

すがすがしい快晴の朝に似合わず、気まずい空気がその場には流れます。だが、そこでマミがゆっくりと口を開いた。

「まあ、いいわよ。過ぎたことだし、それに生きていればそれでいいって、昨日私に言ったのは誰だったかしらね？」

その言葉にアンリは頭を上げ、口をひきつらせながらもマミの顔を見た。

「あー、オレ。です」

「ハイ、よろしい」

アンリが召喚されて二日目。この二人の間にはしつかりと主従関係が結ばれているらしい。・・・だが、想像してほしい。この時、高校生ほどの男が小学生の女の子にいいように遊ばれるということ。かなりシニールな場面であることを。

それとはかく、マミは満足そうな表情をしてアンリに言う。

「その夢の事は置いて、今から魔女を探しに行くわよ」

その言葉に反応し、アンリは自らの頬を両手で叩いて気を引き締める。

「よし！・・・っと。了解だ。そういや魔女はどうやって見つけるよ？『魔女の口付け』でマーキングされた奴の後でも追うのか？」

「残念ながら違うわ。魔女を見つけるのはこれ」

そう言いつつ懷から取り出したのは、マミの『ソウルジエム』

「これが魔女の魔力に反応して光を放つの。後はこの光を頼りにつて・・・あら？」

「んあ？どしたよ、なんか調子でも悪いのか？」

「いえそれがね、一昨日から魔力を使ってから『グリーンフィード』にもあててないのに、濁りがほとんど無いのが気になって・・・」

不思議そうに頭をかしげるマミ。それに心当たりがあるのか、アンリは気付いたような表情で言う。

「たぶん、『あれ』じゃねえか？昨日、マミが泣きついてきた時「ちよっ！！」・・・まあその時にオレの宝具使って負の感情を吸いだしたんだよ。そんときにマミの魔力も少し大きくなったから変だとは思ったんだが・・・あれ？おっ、どうしたよ」

マミの顔が驚愕の一色に染まった。しかしすぐに立ち直り、アンリへ問いを投げかける

「あなたの宝具にそんなものがあつたのは覚えてるけど、それって

吸い取った後にその人に魔力を与えるもののなの？」

「いや、吸われた奴は気分爽快！ぐらいにはなっても魔力が回復したりはしねえ。それに、オレの魔力は普通なら他人に分けることはできない仕組みのはずだ」

それを聞くとマミは少し考え込むが、一つの可能性に行き当たる。

「契約のパスがあるからかもしれないわね。それ以外はあまり考えられないけど・・・そちらの魔術って不具合が生じたりはしないの？」

「むしろ穴だらけつってもいいかもな。記憶の代わりに知識として見たらどうが、第五時の聖杯戦争でキヤスターがアサシンを召喚するとカールルの穴をついたこともできたから、今回ののは『戦争』ってわけでもないし、上手いことオレの宝具の穴について魔力だけが持つて行かれたのかもしれない」

疑問は尽きぬばかりである。

「あーもう！そこまでだ！ここで悩んでも日が暮れちまう。その間に魔女に人が食われんのも胸糞わりい。わからん事はほっとしてさっさと行こう」

「それもそうね。このことはまた今度にしましょ」

このままではよくないと思いついびれを切らしたアンリが無理やり話を変えた。マミもそれに同意し会話をきりあげる。

「それじゃ探しましょうか。アンリは霊体化してちょうだい」

「おう」

気合いを入れなおし、玄関に出た二人。魔女を探しに町へと向かうのであった。

家を出てから魔女は見つからず、すでに時計は午後の6時を指している。

赤く染まった夕焼けの下、光を放つソウルジェムを手に、人気のなくなつた路地裏を歩くマミの姿があつた。

どうだ？かれこれ9時間くらいは経つたが、反応あるか？

ええ、ここの奥から。ソウルジェムが反応してる

念話で互いの意思交換をする。ついに魔女の反応を見つけたらしい。

結界に入ったらすぐに実体化する。魔女がいるとこまではそれぞれで探す。見つけたら念話で集合だ。それでいいか？

異論は無しよ。それじゃ、行きましょう

結界に飛び込んだマミの傍らにはアンリが姿を現した。

「うひゃー、これまた趣味の悪いこつた」

「・・・この魔女はずいぶん派手好きの様な」

そう言った二人の前にある結界は装飾過多といっても過言ではなかった。

路地裏の薄暗い壁とはうって変わり、城の様な建物にこれでもかというほどそこかしこに張り付く宝石や金銀財宝。それが普通の物ならまだしも、その貴金属はどこか色がくすみ、外観も関係なくバラバラにくつついていることでどこともなく不快感が漂う。

「来たわ！使い魔よ！」

「わかってる。ンじゃまた後で！」

出てきた使い魔は、ピッケルやスコップを持ち、ぼろ布をまとったミイラのようなだった。この使い魔の役割は『発掘』である。

それを見て走り出した二人。マミの手にはいつものマスケット銃、

アンリの手には先日の使い魔を切り裂いた歪な形をした二つの逆手短剣。『右歯噛咬^{ザリチエ}』と『左歯噛咬^{タルウイ}』を出現させ、二手に分かれて使い魔を掃討してゆく。

アンリの振るう剣には型など無く、本能のまま力任せに剣が振られる。その剣はソードブレイカーの役目通り、彼にむかって振りかぶられるピッケルを巻き取り、もう片方の刃で使い魔達を切り裂いてゆく。

たとえ英霊として最弱であれど、神の加護により、下位ながらも同じ英霊と渡り合える力を持った彼の前には、化け物たる使い魔であれどもその勢いは止められなかった。

対するマミも負けてはいない。リボンで敵を縛り上げ、それを銃でまとめて葬り去るという効率のいい戦法を行っていた。迫りくる大多数を縛り、撃つ。縛り、撃つ。

使い魔達はその数を減らしていった。

それを繰り返し、二人が十分離れたところでマミからアンリに念話が入った。

魔女を見つけたわ！ええっと、場所は・・・

アンリがそこからすぐに行き当たりを右に曲がって直進したところだよ

キュウベえ！？

まったく、アンリの力を見る頃にはそっちに行くと言ってたじゃないか

どうやらキュウベえが正確な位置を覚えてくれたようだ。そのことに驚きつつも、アンリは言われた通りに歩を進める。曲がった角の先には二人が見えた。

「見つけたっ！無事か！っと、ありがとなキュウベえ」

「ええ、こっちは平気よ。キュウベえもありがとう」

「ここで二人が死ぬのも目覚めが悪いからね。当然のことだよ」

「そーかい。しかし、あれが魔女か・・・キモッ」

「気をつけてね、私の銃じゃあまり傷がつかなかったわ」

そういったアンリたち三人の前にいる魔女の名は『エイミー・ド・ナルシツソス』。

『潔癖の魔女』であり、その性質は『傲慢』。その体はガラガラと輝く宝石や金が不出来な球体に張り付いていて、球体自身も垂れた脂肪のようにぐにょぐにょと蠢いている。

突如、その表面に張り付いていた宝石が離脱し、三人に襲いかかってきた。

「甘いわ！」

ギギギイン！と弾き返した音が響く。マミはリボンを目の前に展開し、その全てを防ぎきったのだ。アンリがリボンの合間を走り抜け、叫んだ。

「ちよつと！アンリ！？」

「我慢してくれよ？ちよいと気分が悪くなるかもしれないなあ！マミ！キュウベえ！そこからしっかり見ておきな！

『無限の残骸』オ！！！！」

「きゃ！」

「これは・・・」

その言葉をきっかけに、虚空や地面からは次々と見るもの全てが不快にさせられるような漆黒の『泥』が湧き出る。そのほとんどが魔女に向かい、内一つの泥の塊がアンリの足下からも出現した。

「ガッアアア！！クソがあ！マジで頭痛えな畜生！」

宝具を発動させてからは何故か先ほどより動きが鈍くなった魔女だが、一直線に己に進むアンリを黙って見ているはずもない。こちらに飛ばす宝石の量を増加させるだけでなく、同時に周りの金をいくつもの刃の様に变えて泥を切り裂いている。その近くには残った使い魔も集合し、泥のバリゲードとなっていた。

後方からいくつもの銃声が鳴り響く。マミの援護により、アンリに向かった宝石を撃ち落としたのだ。

「サンキュ！このまま突っ切らせてもらおう！」

「キアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！
！！！！！！」

54

「くらつとけ!!!」

間を詰め、掛け声とともに泥を纏わせた『ザリチエ右歯嚙咬』を力任せに横薙ぎに振りぬいた。延長された斬撃は奇声をあげ続けていた隙だらけの魔女を、近くの使い魔ともども一刀両断にする。

魔女がいた場所からはグリーンフィードが出現し、それを空中で掴み取る。それと同時に結界は消え失せ、すっかり暗くなった空の下に静かな路地裏が戻ってきた。

武器を消し、頭を右手で抑えながらも、軽い足取りでマミのいる場所にアンリは駆け寄った。

「よっ、お疲れさん。あの泥にや触れてないな？」

「大丈夫よ。私自身は何ともないし、掠ってもいないわ」

「そいつは良かった。あんときゃ援護サンキューな」

「ええ、ちょっと危なっかしくてつい手をだしちゃった」

「おかげで邪魔もなくなったり着けた。マミもやるもんだ」

パチン！と二人でハイタッチ。互いを健闘し合い、初陣が無事に成功したことを喜び合っていた。その後はすぐさまグリーンフィード（以下G・S）でマミのソウルジェム（以下SG）の穢れを吸収する。それを見てからキュウベえが疑問を挟んだ。

「アンリ、さっきのは一体なんだい？さっきの泥からは絶望なんて比じゃないほどの何かを感じたけど」

「ああ、お前には言っ てなかったか。 ありや宝具つつもんでな？ オレら英雄のシンボルが武器になったようなもんだ。 ・ ・ ・ まあオレの場合、使うのに大量の魔力がいるわ、 疲れるわ、 頭痛がやべえわの三重苦でな。 あの泥を使った分の悪意^{デズリット}だけ全部こっち来て、 残りは全部魔力が霧散するつつうド三流の宝具だ。 ったく、 まだ頭が痛え」

「 ・ ・ ・ へえ、 そうかい」

どこかトーンが落ちたようなキュウベえの声。

「まあ、 君が戦ってくれるなら魔女も倒せるだろうし、 これからも マミをよろしくね。 アンリ」

いつもの調子に戻ってそう言い残すと、 キュウベえはGSを咥え、 路地裏の闇に消えた。

「？ なんだったんだ、 アイツ」

「さあ？ キュウベえもいろいろ考えているんじゃない？」

そう言くと、 二人もまた帰路についたのであった。

その帰り道、 周囲には人影も見えないので実体化しているアンリは、 ふと思いついた提案をマミにしていた。

「なあマミ、 オレになんか服買ってくれないか？」

「服を？またどうして服なんか」

「いや、もし誰かにオレの姿を見られたときは、さすがにこの格好じゃあまずいだろ？そのもしもの時のために何とか言い訳できるようにさ」

「言われてみればそうね。それじゃ明日は服屋に行くからどんなのが欲しいか霊体化しながら教えてちょうだい」

「おう、ありがとな・・・ん？あ！」

服を買うことを決定したはいいが、彼はまた何かの問題点に気づいたようだ。

「今度はどうしたの？」

「いや・・・戸籍どうしようかって・・・」

「え？ああ・・・」

そう、召喚されてこの世界に来たアンリは戸籍というものが存在しない。こんな幼な子の家に住み着いて、服を着ていたとしても全身刺青で身元不明の男・・・どう考えても怪しすぎる。

「これも明日、服買ったら役所行って何とかするしかねえか。ハア・・・どう説明すればつかまらねえんだろ・・・色々オレってアウト過ぎんだろ」

初陣で高揚した気分も、途中で気付いた大きな見落としにアンリの

気分は底に沈んだ。

「私も何とか手伝うから、ね？」

「うう、すまん・・・」

そして年下のママに慰められるアンリ・・・これまたシュールな絵がここにあった。そしてこの後日、アンリは天気を見て大きな問題に直面する。

その力の一端を見せ、勝利を収めながらも日常の罨にはまった『この世全ての悪』（笑）。彼は新たな世界で今日も生きていくのであった。

夢見・宝具・潔癖・初陣（後書き）

今回は裁判所で！・・・ということにはならないのでご安心を。

最初の方の『記憶』ではなく『知識』の流出は、全部神様ってやつの仕業なんだ・・・

戦闘シーンつたなすぎっ！短っ！と書いてから軽く反省しています。だが、後悔はしていません。それから今回もマミさんが大人過ぎる気がする・・・。キャラ崩壊のタグを入れるかどうか迷いますが、しばらくはそのままにしておくことにします。

戦闘の泥の使い方は黒桜さんを参考に「できるかな？」と思ってやりました。宝具としての発動なしで鞭にできる桜さんマジぱねえっす。

それでは今回もありがとうございました。

日常・再会（前書き）

今回は閑話みたいな物です。何気ない休日のひとつ時書かせていただきました。

日常・再会

日曜日。

それは職業問わず、大多数の人が休みの日であり、一週間の憩いの時間を連想する人もいるだろう。二人も例にもれず、この日曜日は魔女の探索をやめ、住民登録の手続きと衣服を調達する予定だったのだが

「雨、降ってんなあ」

「そうねえ」

ザアア・・・と天から降り注ぐ雨。見た目の問題上、アンリは着の身着のまま人の前に姿をさらせないなので荷物を持つことができない。ゆえにマミが買って帰るしかないのだが、この雨天では買ったものが濡れてしまう。

このままでも埒が明かないのでしぶしぶといった表情でアンリが切り出した。

「マミ、金渡してくれ。自分で服買ったならそのまま戸籍の手続き済ませてくるから」

「えええ!!?」

マミが驚くのも仕方がないだろう。上半身裸・赤い腰布一丁・全身刺青・肌の色etc.etc……ここまで記した他にも突っ込みの入れようは多々存在し、外を出歩くだけでもきつい問題点を抱えているのだ。

「でもさすがにあなた一人じゃ、ちょっと…ねえ？」

「よく考えたらさ、オレみてえなのがママの傍にいてもっとやべえと思うんだ」

追記事項：誘拐疑惑　までが追加されようものならば、確実に刑務所が待っている。さすがにそれは不味いと考え、先の提案をしたのである。

「そういうわけだからママは家で待機しといてくれ」

「ハア、仕方ないわね…それじゃ、はい。」

「ん。おお、結構あるな」

渋々といった表情のママからは、アンリへと衣服の予算と黄色いチエック柄の傘が手渡された。その額は結構なものであり、彼女には市からの補償金が出ているのである。

玄関前まで移動すると、バツ！と傘が開かれる。

「頑張ってくるからな。行つてきまーす！」

「気をつけて！行つてらっしゃい！」

右手をひらひらと振り背を向けて歩き出す。後ろのママから見送られ、この日に初めて、別行動を開始するのだった。

「嗚呼、周囲の視線が痛かった…」

数十分後、何とか赤いサイレンのお世話にはならなかったものの、とあるデパートに行くまでの間、周囲の通行人からは好奇の目で見られ、アンリはうんざりしていた。

「さっさと探すか。ええつと服、服は、と。…ああこっちか」

衣服コーナーを見つけ、そちらに向かった。その中にいる店員を発見し声をかける。

「すみませーん」

「あ、はい。どうなされましたかお客さ……！？」

「いや、落ち付いてください。普通に買い物しに來ただけで不審者ではないですから！」

「し、失礼しました。コホン！本日はどのようなものをお求めで？」

さすがに驚きはしたものの、咳払いで気持ちを切り替え、すぐさま営業スマイルへと変わる店員。まあその口は少し引き攣ってはいいたが。

「ええつと、この刺青が上手いこと隠れて黒か赤の模様が入ったのありませんかね？予算は6万円位なんですけど」

「それでしたらこちらにどうぞ。ご案内いたします」

注文の内容から、まともな人であると判断した店員は通報の考えを

思考の隅に追いやり、アンリを目当てのコーナーまで案内した。これで第一関門突破といったところか。

「こちらの品はいかがでしょうか？お客様の要望通り、上下セット。色合いは黒地に赤のラインがデザインされたライダースーツですが・・・」

「（金ぴかの色違いっぽいなこれ）まあ、これがちょうどいいか。あ、そっちのシャツも一緒にいいですか？」

「承りました。ではレジにどうぞ」

そこまで言って店員は服を持ってレジへと移動する。アンリもそれに続いた。レジに到着するとバーコードを読み取り、値段が表示される。

「こちらの上下セットが一品とこちらのシャツが二枚。合計で36896円になります」

「じゃあこれで。あ、更衣室借りていいですか？出来ればすぐに着替えたいんで」

「40000円ちょうどお預かりします。ええ、それでしたら左手の道をまっすぐ行った先にあるのでご自由にどうぞ。それではこちら3104円のお返しになります。レシートは「ああ、要りません」はい。それでは、またのご来店をお待ちしております」

説明された通り移動し、早速、更衣室に入って着替え始めた。

おそらく値段は違えども、その服はギルガメッシュのライダーズジャケットと同系の物であり、その違いといえば、下のシャツが黒い

ことと入ったラインの色が赤色で二本という点であろう。

「ん。こんなもんか。しっかし似合ってるのかねえ？」

肩を回してサイズや動きやすさの確認をして、同じように靴屋に向かう。こちらは無難にスポーツ用のシューズ（黒）¥4980を購入。何故か足に巻いてあった黒の包帯が伸びたので、足全体に巻いて靴下変わりにした後、再び確認してから店を出た。

着替えた姿で市役所へと足を進める。先ほどより視線の数は減ったが、今度はその格好とはジャンルの違う傘の色合いの不釣り合いで、少し目立っていた。

「まあこんなもんでいいだろ。次は、っと」

もう慣れたのか、そんなこともどこ吹く風。こちらに来てから叩き込んだ頭の中の地図を思い出し、役所へと歩を進める。

「おうわ！？」

が、突如激しい光がアンリを包んだ。

光が消えたのを確認し、顔を覆った手をどかすと、見たことのある場所にいた。

「久しぶりだな？そちらでは3日ほど経っているか」

後ろから聞こえてきたのは、懐かしい知神ちじんの声であった。

「ったく、いきなりどうした、神さんよう？」

当然、そこにいたのは、いつぞやの自分を転生させてくれた神である。

「ふむ、突然すまないな。頃合いだと思って声をかけたまでだ『この世全ての悪』。中々その格好も似合っているぞ」

「へえ？そりゃ、ありがとよ」

お互い親しい雰囲気では話を始める。久しい再会に両者の顔はいい笑顔であった。

突如、右手のひらを上に向け、神は一枚の『用紙』を虚空から出現させてアンリへと渡す。

「これはお前の住民票の写しだ。受け取っておけ。すでに生活面の資金も公的な理由で済ませてあるから心配はいらん」

「ハアア！？」

なんと、その用紙にはアンリが見原滝町の住人の一人ということが記されていたのだ。

「いや、え？いいのかよ？こんなことやっちゃまって」

「いや、私ではなくそちらの『世界』が用意したものだ。情報としては日本の巴家へ世話になりに来たという内容のはずだ」

内容はほぼその通りであり、登録名は「巴・M・アンリ」、追記事項には「■族に捨てられた『忌み子』を巴夫婦が旅行先で引き取り、養子として登録」と記入してあった。

「この■族、てえのは？」

「実際に存在する部族で、『この世全ての悪』を生みだした村の末裔たちだよ」

「マジか！？つつかさ、なんだこの設定」

「別になんでもない。ただの世界の修正力だ。まあ、お前の情報に限定されたものだがな」

そこでいったん区切り、神は続ける

「そういえば、お前へ言わねばならぬことがあった。あのキュウベえという個体を知っているな？」

「ああ、アイツって負の感情が全くないから、最近は薄気味悪く思ってたんだが、なんかやらかしたのかよ？」

「あやつの種族『インキュベーター』のしていることだがな？しばらく様子を見ておくといい」

「そりやまたどうして？あいつのやってることは、人類にとって危険な化け物退治の手伝いみたいなもんだろ？」

「あ奴らもまた『抑止』の一種、『真祖』のようなものなのだが……まあ、君には気をつけてほしいのだよ」

「へいへい、御忠告は心にとどめておきますよ」

「何の因果が会ってしまったが、今回の『再会』はそちらの世界からの干渉で起こった現象だ。二度目はないのでな、……先の事はしっかり覚えておくことだ」

そう言うとう右手を掲げる神。そのまま振り下ろすと蜃気楼の様なものが現れ、その向こうにはアンリがここに来る前の景色が映っていた。

「これをくぐれば戻ることができる。今度こそさらば、だな」

「おう、こんな奴にいちいち忠告ありがとよ。もし、また会えたらそんなときやゆつくり、茶でも飲もうさ」

「ほう、嗜好品としては悪くない。ちょっとした約束といこうか？」

「そりゃあいい！約束だ。そんじゃ『また会おう』」

「ああ、『また』」

果たされることなどない『約束』。それを交わし、アンリは歪んだ景色を通る。再び視界は光に閉ざされる。静かに目を開けると、さきほどの役所までの道に戻ってきていた。

「ロマンチックだねえ……約束だぜ？神さん」

その呟きは誰にも聞かれず、人ごみにまぎれていくのであった。

時間は午後の5時半。いくつかの袋を抱えてアンリは巴家に帰宅していた。

「ただいまー」

「あ、お帰りなさい！どうだった？」

「ご都合展開があつてな、何とかなったよつと。ああこれとこれ冷蔵庫に入れといてくれ」

流石にあの神に再会したとは言えないので、事実をはぐらかす。帰りに余った金銭で買ってきた食材を片づけ、リビングに集合。一服ついでから、あの用紙をマミに渡した。

「ほいこれ、親御さんを理由付けに使ったのは悪いが、こういうことになった」

「別にいいわよ。それにしても巴・M・アンリねえ…これは義兄妹としてかしら？」

「いや、保護者としてらしい。年齢欄も18になってんだろ？」

「あら、本当ね。これからどうするの？」

「現状維持。『お偉いさん』が言うには、生活費の問題も無い、とさ。」

そういつてアンリはカーペットに寝転んだ。

「大丈夫？だいぶ疲れているみたいだけど…」

「平気平気、問題ないから先に飯食っててくれ。今日はピザ買ってきたから」

「はいはい。それじゃ休んでおいてね？」

「おう、今日はこのまま休むさね」

そう言つて霊体化して消えたアンリ。彼はそのまま自分の部屋へと移動した。

「さてと…」

時刻は午後11時。流石に雨の降る外にいるわけにもいかないので、あてがわれた部屋にて彼は瞑想していた。

「ちょっとやってみるか…」

そう言つて、彼は

「『この世の全ての悪背負わされし者』^{アンリ・マユ}………」

宝具を発動した。

日常・再会（後書き）

ありがとうございました。

まさかの神、再登場の巻です。最後の宝具発動は何なのか？作者にも分かりません。

次回、時系列が一気に飛びます。もう少ししたら本編はいるので、この小説をどうかよろしく願います。

夏休・休暇・紅槍・桃青（前書き）

最初はアンリ視点です。

次回は説明会に入ります。

夏休・休暇・紅槍・桃青

宝具の実験をしたあの夜から、すでに2年もの時が過ぎている。マミは見原滝中学校へと進級し、中学2年生となった。その間に倒した魔女は数え切れず。何度もオレの腕やら足やらがパージしたこともあった。

そうして今の季節は再び夏。それも夏休みに入った頃であり、現在マミは早いうちに宿題を終わらせるため、家で課題をしている。ここ数日の間に魔女を倒したから、しばらくは平気だろう。ということでおレは暇つぶしに街で散歩していた。

「あ！しましまのおにいちゃんだ！こんにちは！」

「こんにちは。おお、大きくなったな坊主」

「あら、アンリさん。うちの子がすみません」

「別にいいですよ。来年からこの子も小学校だったっけか？友達たくさんできるといいですね」

「はい、ありがとうございます。ほらジン。今からお買物でしょう？」

「はい！またね！おにいちゃん！」

「おう！またな」

今の会話からもわかるようにオレはすっかりこの町に馴染んでいる。この2年の間、マミが学校に行ったりしていて、暇な時間はこの町

の魔女探しを兼ねてゴミ拾い、公共施設の掃除などで時間を潰していたからである。（悪神が善いことするってのも随分アレだが…）そういった慈善的なことやっていたからかは知らないが、時に学校側から子供たちの教育の一環として一緒に町の掃除や、演説をすることもあった。

この見た目については経歴にあった通り、部族から忌み子として捨てられた時に刻まれたこの全身の模様が成長をなくした。という設定が、この町に住む人間全員に知れ渡っている。（なぜか全く怪しまれない）

まあ、そんなこんなですっかりこの町の一員になれたオレが何をしているかというところ……

「この辺も異常なし……っと。次はあっち行ってみるか」

一つの習慣と化した散歩（魔女探し）中である。

先日倒したばかりなのでこの日は出ないだろうとは思っているが、せっかくの中学校生活全てをこのことに消費してマミの青春をつぶすのも忍びない。だからたまにこうやって、オレ一人で探索をしている。

「ここも異常なし！んー。今日はこれまでか？」

まだ昼前なのでいったん家に帰ろうと思ったその矢先、様子のおかしい男性を見つけた。

「あれは……やっぱりあつたな、『しるし』だ。ちよつと後つけてみるか」

首筋にあったのは『魔女の口づけ』。魔女の絶望に惹かれた被害者

だったようだ。

魔女を探した場所が場所だったので、すぐさま霊体化して後をつける。

しばらく尾行は続き、行き着いた場所にあったのは、隣町が近い廃ビル。そこまで確認すると

「案内ご苦労さん。ゆっくり寝てな。起きる頃には終わってるだろうさ」

マーキングされたその男性を気絶させ、ビル入り口の前に移動する。結界に入る前にマミにパスを通じて念話を行った。

よう、結界見つけたからパツと片づけてくる。昼ごろには帰るから心配はいらん

了解よ。あんまり無理はしないでね？

はいはい。そんじゃまた後で

そう言って念話を切り、結界へと突入した。

ここは結界内。ビルの内部をそのまま使用された壁には、おそらく血であるう落書き、人骨が材料のオブジェが乱立していた。

「おっかしいな？使い魔の影も形もねえぞ」

アンリの言うとおり、そこにあるのは結界のみ。使い魔の安定しないものとは違い、しっかり安定した不安定な空間は魔女の物には違いない。にもかかわらず、結界のそこらじゅうにいるはずの使い魔が一匹たりともいないのだ。

一応は罠の可能性を考慮して警戒しながら進んでいたアンリだが、少し離れたところで爆発音が響いたのを聞き、その場所に向かった。そこにあつたのは

「愚絵工工工工工！！！」

「煩い奴だねえ！さつさと消えな！」

ボロボロになっている画材道具を張り付けた魔女と、いくつもの槍を操る『紅い魔法少女』。不思議なのはほとんどの使い魔がそこにいるのも関わらず、その魔法少女が狙うのは魔女だけであるという点か。

だが、この騒乱もその槍が魔女を貫いたことによって終わりを迎えた。結界は掻き消え、使い魔達は主を失ったことで散り散りになる。だというのに魔法少女はそれを追うそぶりすら見せない。マミ以外の魔法少女を見て感心していたアンリだが、すぐさま宝具を発動させた。

「何やってんだ！『無限の残骸』オ！！！」

「ッ…なんだ、アンタ！？」

泥の気配に気付いて此方を見据える魔法少女だが、それを無視して全ての使い魔を泥に飲み込んだ。自壊させず、本当に飲み込ませてから、その泥を使い魔ともども魔力として霧散させる。直後、背後から殺気を感じ、そちらを振り向くと、件の魔法少女がいつの間に

かグリーンフシードを手を持ち、こちらへ槍をつきつけていた。こちらにも『右齒嚙咬』と『左齒嚙咬』を顕現させ、対峙する。

「もったいねえことしやがって。どうやったかは知らねえが、なんで奴らを消した？」

「ハア？危険な芽を摘むに越したことはねえだろうが。こちらら必要以上に戦いを増やしたくねえんだよ」

「なんだ、事情を知ってんのか、そんなの自分の必要な分だけ狩りやあいいハナシだろうが？」

緊迫する空気。正に一触即発の中、だが唐突にアンリは武器を消した。

「あーもう、アホらしい。んな事よりとりあえず座れ。まずは情報交換といこうや」

「……アタシが乗るとでも？」

「好きにしやがれ。オレにとって必要以上の戦いは面倒だっただけだ」

「チッ！白けちまった、しょうがない。話だけは聞いてやるよ」

押し負けたのか。変身は解かないが、武装解除してアンリと向き合ってた座る魔法少女。アンリにとって無益の戦闘はなんとか回避できたようだ。

そしてアンリから話を持ちかけた。

「そりや何よりだ。まずは自己紹介といこう。オレはアンリ。アンタはなんていう？」

「……杏子。『佐倉杏子』だ。それより、なんでアンタは奴らを消した。もつと育ててからグリーンフシードを収穫したほうが効率いいだろう？」

「なーる。そういう魂胆ってか？なかなか甘美な提案だが、無関係な奴を巻き込んでまで魔力を保つこともねえだろうが。ま、他になんかあんなら答えるが？」

「結局アンタもそういう性質かよ……。じゃあ次だ。アンタは『男』だったのに、さっきのは何だ？何で男が使い魔とやりあえる？」

「佐倉も魔法少女ならキュウベえから聞いたことはあるだろ。『英霊』って言葉に聞き覚えは？」

「ああ……アンタがああ『アンリ・マユ』か。御大層な名前だねえ。アンタが戦えるってことはわかった。でも、何でいちいち首を突っ込む？アタシらと違ってグリーンフシードも要らないだろうに」

「自分の住んでる町を守ろうと思うのは当たり前だと思うが？お前も……いんや、こついうのは言ったところでそのやり方が変わるわけでもねえか」

「いい子ぶりやがって……でもまあ、よくわかってるじゃないか。アタシの知りたいこともわかったし、ここらでお暇させて貰うよ」

そう言って立ち上がった杏子。しかし、アンリがそれを引きとめた。

「まあちょっと待て」

「あ？まだ何か用でも…」

「『この世の全ての悪背負わされし物』」
アンリ・マユ

「なにっ!？」

突然宝具を使った。変化した空気に杏子は警戒態勢に入るが……

「まあ予想通りってか？ちょっと話を聞いてもらった足止め料だから受け取るときな」

「おい待て！今どうやってソウルジェムの穢れを…!」

「じゃ、また今度な」

聞く耳持たずというように霊体化してその場を去ったアンリ。杏子が一人残される。彼女はというと…

「今度会ったら絶対絞めてやる…!」

不穏な考えを巡らせていた。アンリに幸あれ。

その後目を覚ました男性を介抱し、町を悠々と歩くアンリはマミと念話を行っていた。

終わったぞ。今そっちに向かつてる

お疲れ様。どうだった？

別の同業者に会った。名前は佐倉杏子。槍を使って戦う紅い魔法少女だ。だが、もし出会ったら気をつけとけ

？どうしてかしら

実は…

……悪神説明中。

そう…どうにかして説得できないかしら？

ありや無理だ。話だけで納得なんかするタイプじゃない。それよりほんとに気をつけるよ？アイツ口悪かったし、ただでさえマミは豆腐メンタルなんだから

ちょ…！それどういう意味！？

そのままだよ。じゃあな、やっぱ夜まで帰らんから宿題頑張れよ

）

待ちなさい！まだ話は終わってな

「ブツツとな。ハア…まあたやつちまった」

強制的に念話を終わらせた。帰ってからのお叱りが面倒だが、いた仕方あるまいと自分の口の軽さに頭を抱えていた。

午後5時。

場所は変わってCDショップ前。そこには桃色と青色の少女がアンリと会話していた。

「～でさあ。恭介落ち込んでて…アンリさんはどうしたらいいと思いますか？」

「ん～音楽家を目指していた、ってことならその恭介って奴が好きそうな音楽関連のものでも見舞い品にしたらいいんじゃないか？こちもちようどCD売ってるしよ」

「そっかあ。いよっし！そうしてみるよ。ありがとね、アンリさん！」

「さやかちゃんの相談に乗ってくれてありがとうございます」

「ああ、人の愚痴を聞くのもオレの趣味だから、そうかしこまらなくてもいいって。鹿目ちゃんもなんか相談あったらオレに言ってみな？」

「わ、私は別に大丈夫です。でも今度なにかあったら相談してもいいですか？」

「おう！どんと来い。あ、そうだ。美樹ちゃんもその恭介の見舞い、今度つき合わせてくれないか？暗くなってるやつはオレが明るく仕立てあげてやるよ」

「それなら是非お願いします！でも恭介は洗濯物じゃないですよっ！」

彼と談笑している二人は『美樹さやか』と『鹿目まどか』。ここ数カ月の間に知り合った駄弁り仲間である。

きっかけは、マミの通う見滝原中学から彼女らが属するクラスが授業の一環としてアンリのところへインタビューをしたことからである。そのインタビューの代表としてこの二人が来たときに仲良くなつたのが始まりだ。

「話している間にもう5時半か…そろそろ帰つとけ。夏休みだからって遊んでばかりはダメだからな？」

「アンリさんまで先生みたいなこと言うんだ？ま、そりゃそうだね。それじゃあまたねアンリさん！約束忘れないで下さいよー！」

「アンリさん、また今度」

まだ夏ゆえに日は高いが、彼女らは中学生。元気に帰宅したのだった。

「気をつけるよー！……『約束』かぁ。神さん元気にしてんのかね？」

二人を見送り、あの言葉を思い出した。二年も前のこととはいえ、彼の中ではずっと記憶に残っている。

「しっかしマミの説教どうすつか…この間無視して霊体化したらいきなり泣き出したしなぁ……」

そう言うとアンリも帰宅した。

この後、家に帰ったアンリがどうなったかはご想像にお任せしよう…

かくして、役者はそろった。

左手に絶望を抱えた少年は、この後アンリに心を洗われた。青髪の少女はそれによって心に余裕ができる。

桃髪の少女も『この世全ての悪』に尊敬を抱いている。

赤髪の魔法少女は彼の力を利用するつもりでいる。

何より金の少女はもっとも関わりを持ち、一人の孤独を味あわなかった。

残るは一人、時の少女である。

小さな変化を抱え、物語は本筋へと移る。絶望は一人が受け持ち、希望が広がった。この変化は、やがて襲来する圧倒的な絶望にどう立ち向かうのであろうか？

組み立てが終わった時計の針は今、動き出す。

夏休・休暇・紅槍・桃青（後書き）

キャストはこれでもいい揃いました。

次回はこれまでに出来てきた魔女の説明と原作との違いについてです。

もう少しで本編開始なので楽しみにお待ちください。

人物・設定・変更点（前書き）

人物紹介です。

詳細設定です。

……です。

人物・設定・変更点

魔女

エコー・ド・ナルシッソス 美貌の魔女

性質：陶醉

冒頭でマミにフィナられた魔女。

見た目は2メートル大の大きな眼球であり、綺麗な瞳の下に直接口が付いていて、美しい金色の髪が瞳から円形に1メートルほど離れたところから生えている。？↑こんな感じでもっともっさり

この魔女は昔に褒められた箇所がそのまま巨大化してこの姿になったと推測される。弱点はその美しい瞳と髪を傷つけられることなのだが、結界に入った者に例外なく見せつけてくるので簡単に隙を作ることができるだろう。

使い魔

役割：人体・自賛

魔女に使われていない人体のパーツがそのまま使い魔となった。ただ、魔女を褒めるためにその全てのパーツにはギザギザの歯がついた口がある。

この口は魔女の「他の人にも褒めてほしい」という望みをかなえるためなのだが、それが自分自身の自画自賛である限り、決して魔女は満足できないだろう。

大きさは魔女と違って標準サイズ。

アントワヌス 潔癖の魔女

性質：傲慢

初めてアンリが戦った見せ場用の魔女。

潔癖の名の通り、汚いものが大嫌い。故にアンリの宝具の泥に触れた途端に無防備になった。

見た目はおよそ3〜4メートルほどの脂肪の塊で、その醜さを隠すためにキラキラした宝石や金銀財宝を張り付けている。ただ、この宝石や金を剥がすことができないと物理的なダメージは入らないので、汚す物を所持していない場合は爆薬や炎などでダメージを与えることが有効。

使い魔

役割：発掘

大きさは約1.5メートルほどの人型をしたミイラ。見た目は魔女とは反対にボロボロの布を纏っているみすばらしい姿。常に城の壁に張り付いた宝石を発掘し、魔女に献上している。

基本は魔女の絶望や望みから出来ているが、この結界の宝石に目がくらんだ人間も素体となっていることがある。全員がピッケルやスコップなどの発掘用の道具を所持していて、攻撃方法が物理攻撃しかないため、見た目とは裏腹に素早い動きをするから注意が必要。

エイミー・ウェインズ 絵心の魔女

性質：指導

杏子がアンリと出会ったときに倒された魔女。

自分の使い魔達に絵心の名の通り、芸術について教師の様な事をしている。だが、使い魔達が一切学習できないので結界は常に授業中であり、この中に足を踏み入れたものは強制的に『授業』に参加させられる。

見た目は顔がパレットで隠れた女教師で、体のいたるところに画材道具が張り付いている。

魔女の中では珍しく、敵対意志を持つ者にしか攻撃をしない。熱心に授業を聞いていれば、それだけで捕えた人間を解放することもある。一応、授業はそれなりに形になっているので、もしも絵について学ぶのなら結界に入ってみるのも一興かもしれない。

この魔女の結界内の文字は魔女文字そのままだが、見た瞬間に翻訳された内容が頭に浮かぶ便利仕様。

使い魔

役割：無知

絵心の魔女の使い魔。延々と授業を続けさせるために生み出された。その姿は幼い人が描いた落書きの中の人物の様な形をしている。魔女と同じく、敵意を持つ者以外には攻撃をしない。よって、この使い魔が魔女となるには相応の年月が必要である。……実際は臆病なだけだが。

アンリの泥にのまれてその全てが蒸発したように見えたが、実は一匹だけ逃れていた。

キャラクター変更点

魔法少女

バマリ

言わずと知れた魔法少女の先輩。

最大の変更点はアンリと暮らしていること。豆腐メンタルは変わらないが、原作と違って両親が死んでからはアンリが家族となったために独りではなかったので精神的に余裕ができ、少しは心理的に強くなった。

バトルの面では大きな成長を遂げていて、アンリが泥を剣や銃、鞭などに変えるトリッキーな戦法だったために、その場に合わせたの連携がこの上なく上手い。

彼女特有の『ティロ・ファイナーレ』はアンリが魔力回復を受け持つため、大幅強化して健在。

佐倉杏子

原作との相違点は殆んどない。だが、アンリがホイホイとソウルジェムの穢れを吸い取ったのを見て、次に会ったらひとつらえて利用しようと考えている。

原作までの一年の間に一応はマリと邂逅するが本作では語らない。

暁美ほむら

逆行した精神が映るまでの間にもアンリと出会ってはいないので変更点は無し。

魔法少女候補（現段階）

美樹さやか

アンリの駄弁り仲間その一。お軽い活発な性格や、おちゃらけた言動はそのまま。主人公の呼び名は「美樹ちゃん」
アンリについての認識は「頼りになるお兄さん」であり、事故にあった恭介のお見舞いを相談するあたりはかなり親しい仲といえよう。最初の出会いは、学校の総合の時間の課題「見滝原町で有名な人についてまとめよう」でアンリをインタビュー相手として選んだことから。余談だが、彼女たちのグループは見事当選した。

鹿目まどか

アンリの駄弁り仲間その二。普通を体現したかのような中学生なのに桃髪とはこれいかに。呼び名は「鹿目ちゃん」
さやかと違って、アンリへの認識は「尊敬する憧れの人」。そのため、アンリの前での言動は少し丁寧な言葉遣いになる。出会った当初は「刺青の怖い人」だったのだが、上記のインタビュー中の会話により打ち解けた。それ以来は町で出会々と宿題や勉強について相談することもしばしばある。
強大な魔法少女の素質は今はまだ持っておらず、曉美ほむらが出現すると同時に発現すると予想される。現在はまだキュウベえの存在を認知できない。

サブキャラクター

上条恭介

すでに入院中の身。この後閑話にてアンリと出会ったため、変更点の詳細は省く。ここで語れるとするならば、悲劇は回避されるかもしれないということだろうか。

志筑仁美

アンリの事はまどさや伝いに聞いている。そのため、認識は「一度はお話してみたい相手」であり、直接面識はない。本作ではあまり接点のないキャラクターのために登場の場は少ないが、語られる事はあるかもしれない。

その他 小話的な設定……

アンリ・マユ ↓ バ・M・アンリ
転生者。まどまぎ原作の事は一切知らず、知っている創作作品はFateなどのみ。

作中での彼の二年間の趣味は自身の宝具の実験であり、世界の狭間で出来なかったことを確認している。

例として

悪意の感じない泥製の謀報動物 ↓ 成功。（集中力が多大に必要。実証者マミ。が、この後悪意にあてられ一時ノイローゼ。

無意識下での発動と、意識下での発動の泥の貯蓄量 ↓ 一部成功。（特定できる個人に限り多量の『負』の吸収が可能。不特定多数は

失敗。五話目の最後にて実験
などである。

杏子とアンリの口調はかぶりやすい……など

人物・設定・変更点（後書き）

少しふざけ過ぎました。とくに最後が……

一応あの魔女の複線設定もありますが、お気づきになられたでしょうか？

次回は閑話の予定です。

追記：同日21時頃 全話魔女の名前改変

エスメラルダ ↓ エコー・ド・ナルシッソス

グリドルナ ↓ アントワヌス

ティシエルパ ↓ エイミー・ウェインズ

閑話・聖夜・二人（前書き）

最初に謝つときます。すいません！

総合PV20000・ユニーク3000突破の記念としてテンションあがってやっちゃいました！

閑話・聖夜・二人

さやかとアンリが約束した年のクリスマス。外はすっかり日が暮れ、雪が降る夜である。見事ホワイトクリスマスになったこの日、アンリは

「へえ、ここがその病院か…」

「そう。ここが恭介のいるところ！」

肌寒い外に揺れる黒と青が特徴的な二人。美樹さやかとアンリは例の人物が入院するとある病院の入り口付近に集合していた。アンリは中々立派な病院に感心して見上げている。

（宗教が違ってもなあ…聖夜に悪神が人をお見舞いってどうなんだか…）

まあ内心引き攣った笑みを思い浮かべていたが。

「んで？病室は何番だ？」

「……3階の××号室。個室で治療してるんだ」

「そこまでひでえ怪我なのか…こりゃ喝の入れがいがあるかもなあ…ま、いこうぜ」

「うん。こつち」

そうして二人は病院へと足を進めた。

××号室にて

「恭介！」

「…さやかかい？またお見舞いに来てくれたのかな？」

「ふっふっふ。今日は紹介したい人がいるの！」

「？一体だれがく…」

その言葉をさえぎるように病室の扉が開かれ、アンリが入室した。

「よう、アンタが上条恭介だな？はじめまして…になるな、巴・M・アンリだ。今日はよろしく」

「えっ……アンリって、さやかのよく言ってた…」

こちらにニヒルに笑いかけてくる、思いがけぬ人物の登場に一時放心する恭介。

当然、口を衝いて出るのは混乱した言葉であり…

「さやかの彼氏さん？」

「いや、それはないから！」

息のあったツツコミをもらう。そうして部屋は笑い声に包まれた。

少し落ち着いた3人は姿勢を正し、それぞれが向かい合うようにして座った。

「すみません。この日に連れてくるような人ですから勘違いしちゃって…」

「問題ない。悪いのは美樹ちゃんだってだけだ」

「ハハ…それはともかく、どうしてあなたほどの人が僕なんかの所に？」

「いやな、美樹ちゃんがアンタに喝を入れてほしいなんて…」

「いやいやいや。見舞いに行きたいつつたのはアンリさんのほうでしょう!？」

「まあ、喝を入れときたいのはマジの話だ」

「は、はぁ………」

身に覚えがないが、何かしてしまったのかと恭介は不安になる。ここで突然さやかが立ち上がり、

「それじゃアンリさん。後はよろしく!」

と軽く敬礼して部屋を出てしまった。苦笑し、アンリは言う。

「そうおびえなさんな……。で、だ。ちょっとした相談役のお兄さ

んだと思って話してほしいんだが、恭介君はバイオリンやってたんだって？」

「あ、はい。でもこの手になってからはどうにも諦めがちで……すいません。診断はもう少し経ってから出るらしいんですが、どうにも治るのか不安で……」

「そのことだが、別に治らなくてもいいんじゃないか？ 繊細な動きは無理でもリハビリすればちょっとは動くんだろ？ それなら、日常生活に支障も無いだろうしさ」

「……！」

爆弾発言をアンリは投下した。

恭介は今までバイオリン一筋でやってきたのに対し、あまりにもな言い草である。こんなことを聞かされて恭介は黙っていられない。

「あなたに何がわかるんですか！！？ 僕の手が治らなくてもいいとでも言うんですか！ 他に道があるからその道を進めと？ ふざけないで下さい……！ そんな言葉はもう聞きあきたんですよ……」

言葉を続けることにしぼんでゆく音量。恭介の目には涙があふれており、それが寝ているベッドのシーツを湿らせる。

「すっきりしたか？ そんなじゃ続けるからよく聞きな」

そんな恭介の様子にもピクリとも反応せず、あきれた表情のアンリは言葉を区切って溜息を吐いた。

「そりゃあ恭介君がバイオリンができなくなって悲しいだろうさ。」

オレだって自分の手がそんなことになったら恭介君と一緒に周りにあたってしまふ」

「なら……！」

「最後まで聞けつて。でもな？手が無くなった訳じゃあるまいしさあ、大げさすぎるんだよ」

そこまで言うつと恭介はアンリを睨みつけ、部屋は静かになった。

「でもな？最近じゃ腕まではいかねえが、指をはやす魔法の粉みたいなので開発されたつて話だ。そんな風に日々、医療は進歩を続けてる。まあ何が言いたいかつてえとだ……」

「……」

「お前も歩け。道がなきゃ作ればいい。手が無いなら腕ごと落としてでもさっさと走れ」

「……は？」

最初と最後で話のつながりがほとんどない。それどころか、腕を落とせとはどういう意味なのだろうか？

「面倒いからお前つて言うがな？お前さん、ずっとこの病院でくすぶってるらしいじゃねえか。見舞いの客がいなかったら独りで声を殺してみつともなくピーピー泣いてよお、それでも手前は男かってんだ」

「え、え？何でそのこと……」

「アンリさんは何でも知ってるんだよ。最後にひとおーっ!!」

結局答えにもならないようなこと言ったことに加え、初対面の人物が他の人も知らないことを知っていた為にうろたえるが、その疑問にも聞く耳持たないアンリ。指をズビシ!という擬音でもつこうかという勢いで恭介につきつけ、言った。

「動かないもんは気合いで動かせ!お前一人が立ち止まるってんなら周りを巻き込んででも進ませる。それでも左手の事が不安なら、オレがその不安を貰ってやる。だから近くの人の手をその手でとってやるくらいの事はしろ。ほら…よっと!」

「うわ!?!」

強引に恭介の怪我した手をとったアンリ。突然つかまれた痛みと驚愕で恭介は目を白黒させている。するといつの間に戻ってきたのか、横からもさやかの手が伸びてきて、二人の手と繋がる。

「さやか…?」

「あたしも恭介を引っ張るから一緒に歩こう?幼馴染じゃない」

「あ……」

「そっいうわけだ。頑張りな?少年」

しっかりと二人の手が重なったことを見届けたアンリは、二人から離れて窓に手をかけた。

「「アンリさん!？」」

「おう、すっかり息ぴったりじゃねえか？その調子で頑張れ、オレも陰ながら応援するからよ？そんじゃ、またな！」

そう言つて窓から飛び降りたアンリ。驚いた二人はそろつて窓から身を乗り出し、アンリを探すが…

「ちよつとここ3階……!!つて、え？」

「いない……一体どこに……？」

アンリの姿は影も形も無く、呆然とする。それにさやかはすっかり言葉をこぼした。

「あーもう、打ち合わせと違う……あ。」

「さやか？打ち合わせってどういうことかな？」

気付いても時既に遅し。ゆらりと此方を見る恭介からは、いかにもなオーラが立ち上っていた。

「えつと、その、ね？アンリさんが恭介励ましてくるつて言つたから二人で最後は恭介と手を取り合つてハッピーエンドでしたつていふかなんていふかその全部恭介のために最後だけは仕組んでそれ以外はアンリさんが話持つて行つてその……あの……」

「プッ……」

「へ？」

した。今度はさやかの纏う雰囲気が変わったのを感じ、恭介はさやかを見据える。

「さやか？」

「恭介、あのね……あたし、あんたの事が……」

自分の中の勇気を絞り出し、意を決してその言葉を伝えた。

そのころ、病院からさほど遠くも無い路地裏で

「ま、これでハッピーエンド。ってか？痛ツツ……！慣れない魔術は使うもんじゃねえか……」

アンリが出血する右腕を抑えながら二人の様子をうかがっていた。ここにいるのは、あの時、霊体化で姿を消し、ここで諜報様に作った泥の動物で二人を見ていたからである。それだけのはずが何故、怪我をしているかという……

「『ギョーフGEOFU』と『アンスールANSUR』と『ケンKEN』、そして『エオロEOLH』か……魔力任せに無理やり正常発動させようとするとうっとうちまうとはなあ……固有結界のオーバーロードでもないってのに、魔力もかなり持ってたしよ、難儀なもんだ」

ルーン魔術の強制使用。恭介の手をとった時、保有スキルも無いのに代価は全て自分持ちで祝いをかけたからである。

G E O F Uは『贈り物』を意味する。それで関係をこじらせないようにした。

A N S U Lは『□』つまりは言葉を意味し、少し積極的になれるようにした。

K E Nは『火』。その意味の中にある自分の力（回復力）を助長させるために使った。

E O L Hは『保護』の意。それを逆位置として使い、自分がその負担を請け負えるように仕向けた。

そうして恭介の読み通り、二人の仲を進展させるようにしたのだ。

「ったくよお。オレは『セイギノミカタ衛宮士郎』でも、その皮をかぶってるわけでもねえんだから、これつきりにしないとな？ツクク」

自分の在り方を思い出し、苦笑したアンリ。だが、その顔は、とても満足げな表情であった……

町には雪が降り続く。聖夜の下で二人はどうなったのか？それはまたのお話。

そして悪神は絶え間なく動き続ける。彼の周りの負を全て背負うために……

閑話・聖夜・二人（後書き）

ぎゃあああ！やっちまいしました。説教ひどすぎ・恋愛（笑）・キラ崩壊！の三重苦！

大変の見苦しい物をお見せしてしまいましたが、これだけは書いておきたかったんです。ごめんなさい。あと変なテンションでいつも以上に駄文に……

次回からはついに本編は入りますので、最近空気になっていたマミさんも見せ場たっぷりです。よろしくお願いします。

相違・契約・布石・暗躍（前書き）

ついに本編開始です。……やばい。自分の拙い頭じゃ原作に取り入るすきを見つけれない！

相違・契約・布石・暗躍

「それで、後2日は右肩から先が動かないですって？」

「霊核に直接ダメージ入ったから修復に時間がかかる。戦えない訳じゃないから安心しろって」

「そういう問題じゃないでしょ！まったく……『正義の味方の真似をしてくる』だなんて訳の解らないことを念話で呟いてから数ヶ月いきなり居なくなって何をしていたのかと思ったら……」

「まあ反省はしている。しかし後悔はしていない」

「どこの情緒不安定な加害者よ！？もう、そんなになるまで無理しないでちょうだい……」

「あー、つと？すまんかった。（やべえ、殆んど自傷行為でした。なんて言えねえ……）」

すっかりマミも中学校の最上級生になったある日の午後、アンリはひよっこりとアパートに姿を見せた。どうやら、これまでの数ヶ月の間（閑話含む）、マミから離れて自由行動をとっていたらしい。ちよくちよくと念話で連絡はとっていたようだが……

まあ、ご覧の有様である。アンリは内心大焦りで冷や汗をかき、マミはマジ泣き寸前の大惨事。彼女の方は、アンリが居なくならなかった嬉しさと怪我をして帰ってきた悲しみで心が安定していないのだ。ちなみにこの日は夜までの時間全て、アンリが慰めに費やしたらしい。

後日、快晴の朝

ピピピ……

鳴り響くアラームが自己主張を始め——運命の一月が始まった。

その朝、リビングにて

アンリがまた提案を持ちかけていた。どうやら令呪の使用を促しているようだ。

「どうしたの？令呪を使ってほしいだなんて」

「まあまあ、いつもの実験だ。この紙に書いてある事をそのまま呼んでくれたらそれでいいから」

飄々とした態度でそう言い、紙を渡す。渋々ながらもマミは納得し、残り3画の令呪を発動する準備に入った。

ちなみに、この令呪は何故か魔力を持たない（魔力の運用を出来ない）人間には視認できないので、いままでそれで問題になったことはない。

「ハア、あなたの判断だもの。仕方ないわね……ええつと？

『令呪を以って命ず。新たな主従の契約を交わす事を許可する』…

…って、ええ！！？」

すらすらと読み上げ、その内容に驚くも時既に遅し。
左肩から熱を感じると共に『円』が消滅した。

——令呪：残数2画

マミは熱が引くと同時に理由を聞いた。内容が信じられないものであり、アンリに見切りをつけられたかと思ったからだ。

「オイオイ落ち着けて。オレの魔力が他の奴にも供給できるかの実験だから、マミとの契約が嫌になった訳じゃない。いわばオレにも『使い魔』ができるかどうかの実験で心配だったから令呪のブーストをかけて貰っただけだ」

「よかった……」

だがそんな筈もなく、本当にただの実験だと知って安心した。同時に時刻は登校時間が近いことを確認し、再び驚愕する。

「いけない！もうこんな時間！？」

「あ、やっべえ……じゃなくて！さっさと着替えてこい！荷物の準備はこっちでしておくから！」

「ありがとう！」

長年の経験より、慌てながらも作業分担はしつかりこなす。今日は一段と騒がしい朝になったようだ。だが、そのせいで一画消費されただけのはずの令呪が『形を変えていた』ことに二人は気付かない。

キン コーン……

鳴り響く終業のベル。今日も無事、見滝原中学校の授業が終了した。3年生のとある教室では、マミが帰り支度をしていた。魔法少女という危険な役を持つている彼女は当然のことながら部活動には入っておらず、くる日も早々に帰宅するのである。そんな彼女の本来の史実と違う事は――

これから巡回に入るから、いつも通り準備をお願い

りょーかい。……今そっちに分体を送った。今回の形状は狼。触っても悪意の感染も無いステキ仕様だぜ？

もう、おふざけはほどほどにね？

ハイハイわーかってるって

そう、彼との会話である。先ほどのやり取りからも伺えるように、警戒態勢の日は学校が終わってからは、こうして連絡を取り合っていた。

最近はその宝具、『無限の残骸』を器用な制御が可能になってからというもの、こうして動物を模した泥を2体までなら宝具の解放無しで操作できるようになったので、マミの元へフォローをするために送っていたのだ。

夕方。

所変わって場所は中学校にほど近いカフェテラス。町に住む人たちの明るい声をBGMに、マミは搜索を続けていた。

「まどか、CD買ってもいい？」

「うん。いつものだね」

同じ制服を着た少女たちの何気ない会話もマミにとって力になる。心は明るく。しかし決して表には出さず、歩きだすのであった。不意にSGがわずかながらも発行を始めた。

見つけたわ。反応からして使い魔だけど……

はいよ。そういや、あいつらはマミの周囲10メートル以内にひそませてある。それと、そっちの結界を特定した。その狼についていってくれ

解ったわ。そっちは何してるの？

使い魔と交戦中だ。……って危ねっ！すまんまた後で　ブツッ

「え！？ちょっと……って切れちゃった。ま、アンリなら大丈夫よね」

アンリも使い魔と交戦中だったようだ。心配だったが信頼はしているので、指示された狼が居たのでついて行った。だが、次に聞こえたのは彼女のよく知る者の悲鳴。

助けて……

（キュウベえ！？）

その声を聞き、歩みを速めた。結界に入っただので変身を済ませ、捻じれ曲がった道を進んでゆく。その先に居たのは――

「あわわ……」

「うわ……こっちくんな！」

使い魔に群がられている、さきほどカフェテラスで見かけた印象的な髪を持つ二人。鹿目まどかと美樹さやかである。しかもその腕に抱えられていたのはボロボロのキュウベえだ。それを見た彼女の行動は早かった。

魔法を使い、リボンを出現させて蝶の様な使い魔を縛り上げた。

「……！？」

「キィ！？」

「あなた達、危ない所だったわね。でも、もう大丈夫！」

「……どちら様？つてなにコイツ！？」

さっそうと二人の前に現れるが、突然の事に頭がおいつかないようだ。それにかまう暇も無いので、狼が二人を守った事を確認し、その二人を尻目に行動を続ける。

「使い魔ども、すぐに終わらせてあげる……喰らいなさい」

巨大な砲身を縛った使い魔に向け、一縷の容赦もなく発射。所詮は

使い魔だ。それに耐えきれはるはずもなく、この世から姿を消した。そんな未知の体験をした二人はというと

「…」

「すごい…」

放心するように見とれていた。危険が去った事を確認したのか、ア
ンリの狼もその身を魔力へと還した。

ひと仕事を終えたマミは近くに他の気配を感じ振り向くが、その黒
髪的人物は舌打ちと共に去って行った。

「…よし」

「ふー…ありがとうマミ！おかげで助かったよ！」

場所は同じくして。

キュウベえの怪我を治療し、一息をついていた。キュウベえの感謝
を受け取るが、それをまどかたちに譲る

「お礼はこの子たちに言つて。私じゃ間に合わなかったかもしれない
もの」

「うん！ありがとう！まどか！さやか！」

「なんで名前知ってんの！？」

さやかの突っ込みが入るが、キュウベえは昔からそういうタイプだ
ったので気にはしなかった。つづけて互いに感謝を預け合い、それ

その自己紹介に入る。

「私の名前は…」

言いながらも魔力を霧散させ、変身も解く。すっかり制服に戻った彼女は両親からもらった名をにっこりと誇らしげに言った。

「巴マミ。あなた達と同じ見滝原の生徒よ。よろしくね？」

「変身した!？」

「いえ、こちらこそ!」

「そしてこの子がキュウベえ」

「よろしく」

同時にキュウベえも紹介する。前の二人の反応は様々だが、衝撃には違いなかったようだ。その直後何かに気付き、キュウベえに疑問を投げる

「ひょっとして、この子達も…」

「うん、そうだよ…まどか、さやか。実は君たちにお願ひがあるんだ」

「お願い？」

「あたしも？」

再び戸惑う二人。その二人にキュウベえはにっこりと笑いながら運命の言葉を掛ける。

「あのね、僕と契約して」

そうして

「魔法少女になってほしいんだ」

舞台装置の歯車が回り始めた。

その夜、マミのアパートにはあの二人も来ていた。

「もう一人同居が居るけど、彼も関係者だから気にしないでね？ くださいま！」

「うわぁ……」

「素敵……」

二人は、思わず感嘆の声を上げる。それもそのはず。マミの家は整えられたヨーロッパ風のきれいな部屋であったからだ。そこに一人、新しい人物が声をかけてきた。

「お帰り。それといらっしやい。紅茶と菓子を用意していたからお客様のもてなしは出来てるぜ」

「あら、ありがとう。アンリ」

「「アンリさん!？」」

「よう、ひつさしぶりだなお前ら。美樹ちゃんはいないだのクリスマス以来だな？」

「あら、知り合いだったのね」

「ちょっとした駄弁り仲間だ。：ほらほら席についとけ。」

「あ、はい」

「はい」

そうして皆が座ると、キュウベえが居ることに気付き、アンリは口にする。

「なるほど、候補者だったってわけか」

「そう。だから連れてきたの。それじゃ二人とも、魔法少女について説明するわ」

「大体終わったら呼んでくれ。それまで晩飯作ってるな」

そうしてアンリが退室し、説明が始まった。
ソウルジェムや使命について。そして叶えられる願いやその危険性。それを聞くたびに候補の二人は一喜一憂の反応をしていた。その中、まどかは気になった疑問を口にした。

「マミさんの他に魔法少女はいるんですか？」

「あ、そうそうさっき話した例の転校生とか！」

「ええ、私も見かけたけど、彼女も魔法少女でしょうね。かなり強い魔力を持つてみたい」

その問いの答えはイエスだった。加えて、長年の洞察力からその力量を計りとる。次に魔法少女の対立、報酬の奪い合いについての説明を聞き、悩む二人。

マミはせっかくの候補生を無下にするわけにもいかないので、ある提案を考えた。

「ねえ、それなら二人ともしばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」

「「ええ！？」」

「魔法少女がどんなものか、自分自身の目で確かめてみればいいと思うの！」

危険な事につき合わせるのは忍びないが、二人を守るのは彼なら造作も無いだろうと考えた故の決断である。

「そういうわけをお願いね？アンリ」

「了解だマスター。ってな？そういう事らしいから守りは任せときな」

「アンリさんも戦えるの？魔法少女でもなさそうだけど……」

「それは明日になってのお楽しみだ。それじゃ今日は解散だ」

そうしてその夜は解散となった。まどかとさやかはそれぞれの家に帰り、四人は明日に向けての準備を整える。
最初の一日は無事にその役目を終える。

――黒き天に輝く逆月は、ひっそりと町を照らす。

次の日、放課後の廃ビル前には霊体化したアンリが立っていた。目をつむって集中しており、念話を行っているようだ。

そこにほど近い廃ビル前、結界を発見だ。ちょうど来るころにはマーキングされた奴が屋上から出てくるだろうからフォロー頼む

解ったわ。今そっちに向うから待ってて

あれ？アンリさんも念話使えるんだ。それにマーキングって

説明はちゃんと確保してからな？おお、見えた見えた。おい！
こっちだ

念話で話すうちに三人の姿が見え、廃ビル前に集合する。ちょうど屋上にはアンリの読み通り、飛び降りようとしている女性がいた。しかしそれを見逃すはずもなく、マミは瞬時に変身し、リボンを出現させて落ちてきた女性を優しく受け止めて地面に下ろす。

「マミさんっ！」

「大丈夫、気を失ってるだけ……魔女の口づけ……やっぱりね」

「口づけ？」

「詳しい話は後！魔女はビルの中よ。追いつめましょう！」

「「はい！」」

マーキングを確認し、急ぎビルの中へ入る三人。彼女らを後ろから覗き見ている黒髪の魔法少女が居ることを確認し、一人霊体化を解いたアンリは声をかけた。

「よう、追わねえのかよ魔法少女サン？」

「ッ！！？」

よほどこの場に彼が居るのが予想外だったのか驚愕を隠そうともしない少女。気にせずアンリは質問を投げる。

「お前が例のストーカーさんか。どっちにしろ鹿目ちゃんに何か用があるのかい？」

「あなた、一体何者？」

「英霊だ。あんたも魔法少女ならこう言えばわかんדר？」

逆に問いで返してきた魔法少女へいつもの問いを返した。かつて杏子と問答した事と同じだ。だが違ったのは……

「英霊？残念ながら知らないわ。もう一度答えなさい、あなたは何者？」

英霊の事を知らなかった。とすると疑問が生じる。居なくなっていた数カ月うちに、キユウベえには「なるべく多くの魔法少女に穢れを吸えるオレの事を伝えておけ」といった内容の伝言をしていた。故に、国内の魔法少女には彼の事が伝わっているはずなのだ。キユウベえ自身からも確認はとっており、目の前の少女は明らかに日本人だ。

仲の様子が心配になってきた彼が次にとった行動は

「訳わかんねえ。とりあえず後で！」

「待ちなさ……消えた！？」

逃げであった。

制止の声を振り切って霊体化し、マミの場所へ向かった。

その頃、中では大立ち回りが繰り広げられていた。

四方八方から迫りくる先日と同系の使い魔達を、空中に拡散させたマスケット銃で片っ端から撃ち落とす。候補の二人の周りには、いつの間にか出現した真っ黒な狼と鷲がおり、二人へと迫る敵をその爪と牙で引き裂いている。

その調子で結界を進み、扉を開いた先にある円形ホールにて魔女を発見した。

「あれが『魔女』よ」

そう示した先にいたのは、薔薇園の魔女『ゲルトルート』

八足の馬の様な体系に蝶の羽が生え、頭はバラのついた泥で包まれている。

初めて魔女の姿を拝んだ二人は、その醜悪な外見に嫌悪の感情をあらわにしている。そんな二人を安心させ、マミは攻撃態勢に入った。パァン！と足元に狙いをつけて撃つが存外に素早い魔女には当たらない。続けて二発三発と続けるが、それも外れた。なかなか当たらないマミに対してさやかは焦りだす。

「ちょ…マミさぁん！当たってないじゃないですか！」

「まあ見てなさいって」

それをものともせず、反撃のためこちらに向かう魔女にクスリ、と笑みをこぼす。その瞬間、なんと外した地面に埋まった弾丸からリボンが生え、上を通った魔女をがんじがらめに縛りあげたのだ。泥の狼と驚も動きを抑えるために魔女の足を食いちぎって拘束する。驚く二人を背に、マミは出現させた巨大な砲身へ昨日以上の魔力を集結させる。

「これが私の戦い方！未来の後輩に…カッコ悪いとこ見せられないもの！！」

照準を魔女へ固定。魔砲を放つ！

「ティロ…ファイナーレツ！！！」

なんの遠慮も無く込めた最大威力の一撃が命中する。使い魔と同じように、魔女はその命を可憐に散らした。グリーンフシードが出現し、主を失った結界は速やかにその役目を終える。長ら

く住人を失った廃ビルは静けさを取り戻し、また一つの平和がもたらされるのであった。

さきほど拾ったグリーンフシードを見せ、説明を開始する。あらかたの説明が終わった時、マミは振り向いて言った。

「あと一回ぐらい使えそうだし、このグリーンフシードあなたにも分けてあげるわ

—— 暁美ほむらさん？」

「……………」

ちらりと視線を移した先にいたのは、さきほどアンリと相対した魔法少女『暁美ほむら』だった。ちよつとした皮肉もこめて報酬の分けを話したが、彼女の答えは

「いらないわ。それはあなたの獲物よ。自分だけのものにすればいい……」

拒否。そう言った彼女はその場を離れ、マミ達の前から姿を消した。

廃ビル前、操られていた女性が目を覚ましたのでそちらのフロアを行った後。姿を消していたアンリも集合し、今日の事を話し合っていた。

「もう、どこに行っていたの？」

「わりいわりい。ちょいとばかし鬼ごっこをな？」

「アンリさん、結局何もしてなかったね」

「む？失礼な。お前の近くに狼と鷲が居ただろう。狼は途中から才
レだったんだからな」

「ええ！！アンリさん狼男だったの！？」

「違うっつの！能力の応用であの姿になってただけだ！」

どうやら魔女の足を食いちぎった辺りからはすでに居たらしい。
その後、こうして遅れて姿を現したのは宝具の影響だと説明した。

「宝具？何それ？」

「ああ実はな……キュウベえ、後は頼んだ」

「やれやれ、しょうがないな。後日改めて話しておくよ」

「ま、そういうわけだ。今度からはちゃんと人の姿でついて行くか
らよろしく」

居なくなっていた間にキュウベえには二つの宝具について話してお
いたので、その方向で話は落ち着いた。その後、英霊について軽く
説明して解散したのであった。

深夜。魔女と戦った廃ビルの屋上に二つの影があった。

「こんなところに呼び出したからには、さっきの答えをくれるんでしょうね？」

「おうとも。渡しといた紙にも書いてあつたろうが。そちらこそ、来たからにはオレの質問には答えてくれよ？」

「約束は守るわ。それじゃ話してくれるかしら？英霊について、あなたについて。そして宝具について」

「いいとも。英霊ってのはな——」

二人はそれぞれの考えを持って探り合う。包み隠さず全てを喋り、自分の目的のために互いを利用するために。

暗い夜は、まだ明けない。

相違・契約・布石・暗躍（後書き）

取り入る隙がない。ってかほとんどアンリが空気じゃん。な今回で
した。

なんかほむらって暗躍が異様に似合う気がする。

ウェルグ・アウェスター

今気付いたが、偽り写し記す万象全然使ってない…！！

それでは、ありがとうございました。

真実・分岐・呪文・菓子・家族（前書き）

ついに物語を大きく変えてみました。どうぞお楽しみください。

真実・分岐・呪文・菓子・家族

草木も眠る丑三つ時。

「チィ、冗談にしちゃあ話ができすぎてやがるってか？……ッざけんな！んだよそれはよお！？」

「それはこちらの台詞よ！あなたの存在はキュウベえ達にとっては最大のイレギュラー。むしろ自分たちのしていることを真っ向からケンカ売られているようなものじゃない！」

かの魔女の巣窟となっていた屋上では、会話が進むごとにヒートアップし、互いの『情報』と『信念』を晒し合い、それぞれの事実に激昂する二人が居た。二人がなぜこんなことになったのかは以下のとおりである。

アンリ・マユは魔法少女の真実を知り、いずれ魔女へと至る運命ともう一つの可能性について自分の予想が当たっていた事を呪っていた。

暁美ほむらは彼の宝具とそのあり方についてを知り、今までの逆行で現れなかった事を怨んでいた。

そのどちらもが正しく認識していたことを、正面から捻じ曲げられたようなものだ。神から送られていた言葉「インキュベーターには気をつける」を今更ながら痛感し、アンリは提案を持ちかける。

「なあ、協力しないか？オレは鹿目ちゃんが奴と契約するのを防ぎ、その『ワルプルギスの夜』を倒すことを手伝ってやる」

「……こちらにとって魅力的な提案な事は確かね。でも、あなたのメリットが入っていないのじゃないかしら？」

「あるさ。オレの、メリットは…」

そこで言葉を区切る。今までにない悪意を無理やり押さえつけ、続ける。

「『インキュベーターども』の策を片っ端からぶっ壊すことができるって事だ。魔法の無駄遣いをする奴らにいい灸を据えてやることもできるしな」

「わかった。それじゃ交渉成立ね。……私が居ないところでは、まどかを、お願い」

「ああ、重々承知だ。そういや一つ頼みがある」

「？なにかしら」

「今までの繰り返しでマミを喰いやがった魔女についてなんだがな？実は——」

その頼みもほむらは承諾し、ここに新たな決意が芽生えた。協力体制をとったこれからの二人の願いが叶うのかは、まだ誰にもわからない。

ほむらが居なくなり、アンリは一人、暁の空を眩しそうに見つめながら呟いた。

「第三魔法 魂の物質化、か…この借りは返すからな。神さん」

その言葉が届いたのかは定かではないが、昇る日の光に負けじと一

つ、流星が輝いた。

次の日の放課後、上条恭介の個室にはさやかがいつもの見舞いに來ていた。

晴れて思い人どうしになった二人の耳には、片方ずつイヤホンが繋がれており、さやかの持つてきたCDを一緒に聴いていた。

「……………っ……………ッ……………」

「恭介？」

唐突に恭介が涙を流し始める。彼女は心配げに訪ねたが

「……………大丈夫。僕の手が動かせるようになるって聞いたら、つい」

そう、彼の手は傷は残るもののこのままりハビリを続ければ『確実に弾けるようになる』と医師から診断されるほどに回復していたのだ。

実はアンリの意図せぬところで、「火のルーン『KEN』」の持つ『自分の力を助長する』という効果が発揮され、彼の前向きな意思と手を動かそうとする祈りが影響したおかげで、つぎ込まれた余分な魔力を無意識に使用し、確実にその手を癒していたからである。

「うん。よかったね……………本当に」

「ああ。これで聴かせることができるからね」

窓から吹き抜ける風が、二人を祝福するかのようにして吹き抜けて行った。

また、次の日。

病院には、まどかを連れてさやかが再び見舞いに来ていた。

「あれ？早いね。上条君、会えなかったの？」

「集中検査するってさー。劇的に治ったきつかけを検査するためだつて医者が必死に言ってた。恭介も勢いにのまれて苦笑いしてたし」

「アハハ……」

「んじゃ、帰ろっかー」

「うん」

そう言つて病院を出た二人だったが、まどかが何かに気付きその方向を指し示した。キュウベえが確認しに行くと

「！これは……グリーンフシードだ。孵化しかかってる！」

「！！なんでこんな所に！？」

危険を感知し、そこから逃げることを提案したキュウベえだったが、先日マミと話した事を思い出したさやかが叫んだ。

「あたし、ここでコイツを見張ってる！まどかはマミさんかアンリさん呼んできて！」

「え…！？」

自分がここに残り、危険を承知の上での提案をした。その事にまどかとキュウベえは絶句するが、恭介という思い人を見捨てられない一心もあり、その決意は固い。

キュウベえもさやかかの元で電波塔の役を果たすことを誓い、そんな友人の心境を計りつつたまどかは急ぎマミかアンリを探しに行った。そして、ついにその場所は結界に吞まれ、さやかとキュウベえは孵化寸前のグリーンフシードを見つめていた。

「怖いかい？さやか」

「そりゃあ、まあ当然でしょ」

「願い事さえ決めてくれれば、この場で君を魔法少女にしてあげられるけど？」

「ん…いざとなったら頼むかも。でもまだ遠慮しとく」

まだ自分には頼れる人物があり、守りたい人もいるのだ。願いではなく自分の力でその人たちを守ればいいのである。

「あたしにとっても大事なことから。いい加減な気持ちで決めたくないし」

そういった彼女は、とても頼もしく見えた。

その頃、結界の外では

「マミさん、アンリさん、ここにです!」

「ええ!」

「おう!」

戦える人物が到着していた。マミがソウルジェムをその空間に掲げると結界に穴があき、それに3人は乗り込んだのだが……

「ワリイな?お先に!」

「あ!また勝手に……」

アンリが先行しながら霊体化して姿を消した。いきなりの事もいつも通りのため、マミは立て直してキュウベえに連絡を入れた。

「キュウベえ、状況は?」

先行したアンリはすれ違いざまに使い魔達を自らの剣で切り裂きながらも、一直線に進んでいた。

「曉美ちゃん、足止めは頼んだぞ……」

一応心配だったので例の狼を彼女の影にひそませておいたが、今回の『策』はスピードとの勝負である。

「！……見えた！無事か！？」

「ま、間に合った…」

「グリーンシードが…孵化が始まった！」

キュウベエの言うとおり、グリーンシードには変化が訪れていた。しかしアンリはここで宝具を使用する。

「『アンリ・デッド・レイズ・デッド』無限の残骸』！そして、『^{セベ}告げる』！」

発動させた宝具の泥が魔法陣を描き出し、その勢いにさやかとキュウベエは魔法陣から急いで離れる。それを確認し、彼は詠唱を開始した。

「『———告げる。』」

汝の身は我が元に、我が命運は汝の業に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』」

そこでマミとまどかの二人が到着し、直接感じ取れるほどの膨大な『マナ』が溢れかえる。

「キュウベエ！アンリは何をしようとしているの！？」

「解らない…こんな膨大な魔力、今まで一度も使われたことが……」

「みんな！あれ！」

まどかが指した先にいたのは、完全に姿を現したお菓子の魔女『シヤルロッテ』。

ぬいぐるみの様な愛くるしい姿をした、魔女の中でも珍しいタイプだ。だが、その身は周りの空中を漂う泥に囲まれ、それに触れないようにするために魔法陣の中心から動けていない。
アンリの詠唱は続いていく。

「『誓いを此処に。』

我は常世全ての悪と成る者、
我は常世全ての善を敷く者。』」

善悪の入れ替わった詠唱。身を預けるのは契約者の背負う業。そして最終段階に入る。

「『汝三大の言霊を纏う七天、
我が呼び声に応えて来たれ、天秤の崩し手よ——！』」

中心へと収縮する魔法陣。辺りを漂うマナはその勢いで突風を起こす。肌を感じる魔力が痛みを感じるほどの限界まで圧縮され

——閃光を放った。

「うつ……あれ？」

マミ達3人が目を覆った手をどけると結界は消え失せていた。アンリの姿を探していると、辺りを漂う煙が晴れる。人影が見え、そこにいたのは——

「実験、成功だ！な？『シャルロッテ』」

「（＾－＾）」

頭の上に魔女を乗せたアンリが居た。なぜかその魔女は嬉しそうにしている。結界が無いのに外に出てくることが出来る魔女に危険と判断し、マミは銃を出現させる。

「アンリ、早く離れて！危な…」

「大丈夫だって、実験成功だ。つつただろ？」

「（-.-）フー」

「え？……会話できてる！？」

「『『『ええ！！？』『』『』」

が、なぜか魔女と一緒にあって呆れていた。そこでまどかが魔女と意思疎通できるようになっていることに気付き、今度は四人そろって驚くのだった。

勘のいいキュウベえはすぐさま立ち直り、ある可能性にたどり着いた。

「アンリ、まさか君はその魔女と…」

「当たり前だ。コイツと『契約』させてもらった。もう理性もあるから人は襲わねえし、むしろ役に立つ」

そう、サーヴァントとの契約の呪文。あれは使い魔として最上級の存在である英霊を従えることができるものであり、メデューサが人の姿で理性を持って召喚されたことから、一つの可能性としてアンリが考えていたことだったのだ。

繋がったパスに流れるのは魔力ではなく、『絶望』。アンリが泥を使ったときに流れる負が全てシャルロットに渡り、シャルロットがその絶望を魔力へと変換してアンリへ渡す。いわば簡易的な『永久機関』を作成したのである。

「そんな……こんなことが」

「おいおい、どーしたよ？ キュウベえ」

あまりの事に絶句を通り越しているキュウベえ。そのままキュウベえが居なくなっただので、流れ的にその場は解散となった。とりあえずまどかとさやかには後日、説明をするとして、アンリとマミも家に戻ったのであった。

マミ宅。リビングにはアンリとマミが向かい合っており、その表情はいつもより真剣だ。場には重い空気が流れ、二人は沈黙している。……ただ、シャルロットがアンリの頭上に居ることで、シリアスもぶち壊す勢いだが。

それはともかく、アンリは話し始めた。

「マミ、令呪でやってもらったことがこれ『魔女との契約』だ。この件に関しては手ごたえとして令呪サポートで何とかなったから感謝してる」

「それは解ったわ。その魔女に害がないのも理解できる。でも、その他に話したいことって何かしら？」

「それは、だな。……いや、言おう。心して聞いて欲しい。これは信頼できる筋からの情報だが……」

決断してアンリは話し始めた。魔法少女はキュウベえ達『インキュベーター』が宇宙の寿命を延ばすための手段として創りあげたエネルギーの搾取手段でしかないという事。

魔女は魔法少女が絶望し、ソウルジェムを完全に濁らせた時、魂の穢れと共に変化した成れの果てであるという事。

その時に心の天秤が傾き、第二次成長期の少女が持つ希望が墮ちることで、膨大な『感情エネルギー』が発生し、インキュベーターはそれを回収する事を繰り返してきたという事だ。

マミは話が進むたびに顔が蒼白になってゆく。アンリが言ったことは信じられないが、同時に、彼自身を信頼している自分がその言葉を受け取ってしまう。ないまぜになった感情は言葉となって飛び出し、自分を抱えてうずくまってしまった。

「ソウルジェムが魔女を生むなら……みんな……死ぬしかないじゃない……私はどうすればいいのよ……!?」

「落ち着け！マミ！！気をしっかり持て……ックソ、『この世の全ての悪背負わされし者』……シャルロッテ、お前も手伝ってくれ！」

「（くー）コクリ！」

感情は爆発し、疑問は不安を生み、揺れる心はソウルジェムを急速

に濁らせていく。それを見過ごすわけにもいかずに宝具を任意発動し、シャルロッテの助けも借りて穢れを次々と吸い取っていく。このままでは埒が明かれないと思ったアンリはマミの肩を掴み、しっかりと自分の眼と彼女の眼を合わせて叫んだ。

「マミ！違うだろ！？お前にはオレが居る。いつでも、どんなに離れていても穢れを背負うことのできるオレが居るんだ！

絶望寸前だろうが、後悔に苛まれようがそれでもお前の魂と体は人間のままで、生きている！

——それを、希望が無いとお前は嘆くのか！！？」

かのアンリ・マユがその時のパートナーへの叱責として使った言い回し。彼とは違う自分だが、ここは『本物』の言葉を使わせてもらった。

「あ、ああ……」

「大丈夫だ。マミの心はマミだけのものだ。こうして知ったからにはお前も魔女にはならないから。だから信じてくれ、マミを。自身自身を」

彼女はいまだ揺れる瞳ではあったが、ソウルジェムの汚濁はおさまった。

『自分自身を信じる』。この言葉を抱いてそのまま彼女は眠ってしまった。この数年間の自分の持っていた世界が崩れてしまい、限界だったのだ。

寝てしまったマミを寝室へ運び、ベッドに寝かせてからアンリは再びリビングへと戻った。

「お疲れさん、シャル」

「（・・）ケプツ」

「あらら、ちよいと喰わせ過ぎたか。でもありがとな？オレ一人じや吸収しきれなかったからよ。……うん。今は安定してるし、いい夢見てるみたいだ。幸せなオーラがパスを通じて流れてきた」

「（・・）？」

「ああ、そうかわかんないか。今つなげてやる……ほら」

「！（^^）！」

「気に入ったか？今度は自分で感じれるように頑張れ」

「（^^）／ハイ ……（・・）zzz」

そうやって肩の上に移動したシャルロッテといくらかの会話（？）をし、アンリも休憩に入った。シャルロッテは元気に返事をした後はそのまま眠ってしまったようだ。

初めて出会った夜のように一度は騒がしくなって、また静けさが漂う夜に戻る。こうして、運命を越えた彼らにはシャルロッテという新しい家族と、マミの成長という出来事があったのだった。

史実の物語はその形を失い、骨組みだけが残った形になった。その骨組みにも新たな骨が加わり、新しい形を作り上げていく。

最初より美しいものになるか、最後に全てが壊れてしまふのかは分らないが、今はただ順調に積み上がってゆく。
完成した物語を知る者は誰一人としていない。

真実・分岐・呪文・菓子・家族（後書き）

マミらせません！断じて！絶対に！

……すいませんヒートアップしちゃいました。なにはともあれ契約
もしちゃいました！シャルロット可愛いからしょうがない。ウンウン

では、今日はこれからです。ありがとうございました。

休業・人間・解明（前書き）

今回で一巻分が終了です。なるべくオリ展開作れるようにしないと
（泣）

後書きにはシャルロッテのステータス載せておきます。

キャスターなのに筋力その他が高いって…まあ永久機関だからいい
ですよ？

休業・人間・解明

ここはどこ？私はアンリからあの事を聞いて…あの事ってなんだっけ？それよりアンリって誰だったかしら？

「どうしたんだい？マミ怖い夢でも見たのかい」

「あらあら！怖かったわね？もう大丈夫よ、マミには私たちが居るからね」

あ！パパ、ママ！怖い夢を見たんじゃないで、何か忘れているような……

「そうなの？大事な事なら思い出さないと。あなたも考えてみてくれないかしら？」

「うん。もしかして、友達と何かの約束をしたんじゃないのか？」

ううん。たしかアンリって名前の人で、その人は友達じゃなくて、なんていうか、その

「もしかしてマミの大事な人かい？よし！ここはひとつその人と話をつけようじゃないか！」

ち、違うのパパ！そうじゃなくて家族っていうか……あれ？でも私の家族はパパとママと私だけなのに…どうしてそう思ったんだろう？

「やっと思い出してくれたのね？よかった。マミがあの人を忘れたらダメでしょ？」

「そうさ、マミを任せられる人が…僕たちの代わりに、たくさんの事を教えてあげた人がまつてるんだからね？」

え？パパ！ママ！どこに行っちゃうの！？私を置いていかないで！！

「私たちはずっとそばには居られないけど、あの人は違うでしょう？私たちが居なくても、もっといろんな人に頼らないと！」

「そうそう。マミが『——』になったからって、一人になることはいないんだからさ。……もう僕らもお別れしなくちゃね？」

あ、ああ…思い出した。でも、なんで二人がその事……

「……彼一人に任せることしかできなかった。こんな両親でごめんね」

「でも、マミには幸せになってもらわないといけないから。だから僕らはさよならだ」

「最後に一つ。居なくなった私たちは思い出として残るから」

「マミはそれを背にして歩いて欲しい」

「私たちはずっと先で待ってるから。ゆっくりとくればいいのよ」

「僕らもずっとそこにいるから。だから」

「「またね？愛してる」「」

ずっと忘れない。ありがとうパパ、ママ。私も愛してる……また、ね……

「愛してる……」

目の前にはいつもの天井。しかしマミの頬に涙の後は無かったのです。

そしてリビング。

いつものテーブルにはいつもの華やかな朝食が置いてあった。

「……平気か？ちょっと泣きそうな顔してるぞ」

いつの間にか此方の顔をアンリが覗きこんでいた。

「大丈夫。懐かしい夢見ちゃって」

「そっか……それで、どうする？」

主語が無いが、彼の言わんとすることは分かる。このまま続けるか否かだろう。確かに彼が居れば魔女を狩らずとも普通に暮らせることはできる。もう危険な目に合わなくても済む。だが…

「決まってる、私は魔法少女を続けるわ。今までと同じでしょ？ 違うのは後を知っただけ。……でも、少しは休憩させて貰うわ」

「あいよ。その分はオレがちゃんとやつとく。しっかり休みな」

「お言葉に甘えさせてもらうわ。…でもそれじゃ彼女達の体験ツアーはどうしようかしらね？」

「オレが言つとくさ。『ガイドが不調のためしばらくは休憩です』ってな」

「そうね……ふふっ」

いつもより、ずっと穏やかな朝。悲痛な真実にも負けぬ、幸せな時間だった。

絶望の夜は明け、希望の朝が始まった。

これから始まるのは、救いを振り撒く物語。

陳腐な話ではありますが、話の種には持つてこい。

救いは誰に？ スポットライトは人の数だけ用意します。

誰もが光を浴びましょう。

誰もが主役になれるでしょう。

悪役にも損はさせません。

終わったのは不幸な物語。

始まったのは幸せの結末。

舞台装置は止まらない。役者の応募は締め切った。脚本だけが決ま

らない。

そんな自由な幸せを描いた物語。

未来は明るく、ただ一人だけが損をする。さあさ皆さまお手を拝借…

その夕方、まどかはほむらと結界での足止めの事について聞き、その流れの中でもしもマミが死んでいたらという仮説の後、言い合いに発展してしまった。そして、去り際のほむらの態度には疑問が残り、それがまどかの不安を募らせている。

そう考えている間に、空には星が瞬く夜となっていた。家へと歩を進めるそんな中、見知った姿を見かけた。

「どうしたの仁美ちゃん。今日のお稽古事は…」

「…」

いや、何か様子が変わったと思った。そんな仁美の首には『魔女の口づけ』があつたのだ。

「あら、鹿目さん。ごきげんよう」

どこかうつろな様子で此方を見た。そんな彼女の眼には生気が無かった。

どこに行こうとしているのか聞いたさすが、よくわからない答えが返るばかり。ついには

「そうですね。鹿目さんも是非と一緒に…!」

誘いの声がかかってしまう。そんな中、いつの間にか同じようにうつろな人たちが背後に並び歩いていた。

（この人達もまさか…）

同じく魔女に惹かれた彼女らを見過ごすことはできない。そう思い、頼れる人物に連絡を取ろうとするが、彼女は連絡手段としてのつながりが無い事を思い出す。そうしているうちにどんどん彼女達は進んで行ってしまうので、仕方なく自分もそれに着いて行ってしまうのであった。

着いた先はさびれた工場であった。自分たちが入ると同時にシャッターが閉まり、一つの密閉空間が作られる。その部屋の中には、自らの失態に絶望した男が椅子に座っていた。

「今の時代に俺の意場所なんて、あるわけねえんだ…」

語り終わり、一人の女性が洗剤のふたを外し、他の洗剤が注がれたと思しきバケツへと近づく。それに疑問を覚えたまどかだが、不意に母の言葉を思い出していた。

いいか、まどか。こういう塩素系の漂白剤はな、他の洗剤と混ぜるととんでもなくヤバい事になる。あたしら家族全員、猛毒のガスであの世行きだ。絶対に間違えるなよ

それは何気ない生活のルール。だが、絶対に間違えてはいけない日常の落とし穴。危険性に気付いたまどかの行動は早かったのだが…

「駄目っ！それは駄目！！みんな死んじゃう！！」

「邪魔してはいけません！」

仁美に腕で遮られ、行動を止められる。腕を掴まれ仁美が語りだし、周囲の人々のボルテージは最高潮になってしまう。

そんなことで皆が死んでしまつては元も子もない。まどかは仁美の腕を振り払い、バケツを窓の外へ勢いよく投げ捨てる！

甲高い割れる音と共にバケツは外にぶちまけられ、窓のガラスが割られた事で密閉空間からも脱したかに思えた。しかし、ここにいるまどか以外の人物は皆、魔女に惹かれ、死を願わされた者たちばかりである。その行動は見逃せるはずが無くまどかへ全ての人物が殺到する。

必死に逃げようと思い、近くのドアへと身を隠す。鍵が付いていたのでそれを閉め外音人が来られないようになった。後は自分が脱出し、彼らを死なないように見張るだけなのだが…

（あれ…ここつて…物置き！？）

この部屋は出入り口の無い物置。さらには

「——あ」

忽然と現れたハコの魔女と人形の使い魔。この工場を根城にしていたのである。だから人を此処へ呼んでいたのであろう。

——これって、罰なのかな

当然まどかは獲物で狩られる対象。

—— わたしが弱虫で嘘つきだから

結界の中は弱肉強食。

—— きつとバチがあつたんだ

ましてや一般的な少女にその運命から逃れる力など持ち合わせているはずがない。

—— きつと

影は喰らいつく。

「グルアアアアアア！！」

「ピイイイイイイ！！」

その使い魔達へと。

「……え？」

突如まどかの影の中からいつしか見た漆黒の『鷹』と『狼』が現れ、使い魔達をその爪と牙で引き裂いた。野生の荒々しさの他にも人間の様な凶暴性を見せるその二匹。人形の使い魔を完膚なきまでに破壊した後、魔女にまで喰らいつく。砂嵐を写したテレビの様な殻が破壊され、人形の魔女が姿を現したと同時。

「「シャアアア！！」」

魔女はその身をバラバラに解体された。さながら人が獣に襲^くわれているようであった。狼に四肢を引き裂かれ、腹を喰い破られた魔女は残った頭を鷹に叩き潰されて悲鳴も上げられぬまま消滅した。グリーンフシードを残し、部屋の外では洗脳された人々が気を失って倒れる。

「あなた達は…」

そう問いかけた獣たちの様子は先程の凶暴さが嘘のようであり、静かにまどかを見、佇んでいた。

「ピィ！」

突然、驚が鳴いた。驚き振り返った先にいたのはよく知る人物。

「……約束は守ってくれたようね。ありがとう」

「オオン」「ピィィ」

ほむらが感謝を告げると返事を告げ、魔力へと体を還元する二匹。その役目を全うし、勇姿は溶けるように消えていった。

「鹿目まどか…」

「ほむらちゃん…」

この後まどかはほむらに送られるが、帰り道は終始無言であったという。

ここにいるはずの青い少女はその身を天秤には置かず、自らの幸せ

をつかんだ。正史とずれていく物語にも終わりは来る。ただ、この夜は明けたのだろう。

某所。普段は昇らない電線の鉄塔の骨組みにキュウベえと、ある少女が居た。

「いやあ、まさかキミが来るとはね」

「こっちはマミの奴がしばらく動けないって聞いてわざわざ来てやったのに、話が違うじゃんか？」

「悪いね、この土地にはまだあの獣を扱う人物もいるんだ。伝え損ねただけなんだけど」

「はあ？なにそれ、ちょおム力つく」

そう言うのと立ち上がり、さらに危険な体制へと移ったが少女自身には怯えを全く感じない。

「でもまあいいや、こんな絶好の縄張り、ちょうどアイツも見つけられるかもしれないしねえ」

「どうするんだい、杏子？」

「決まってんじゃん。ブツ潰しちゃえばいいんでしょ？全部」

最後のピースは、当てはまるために姿を現した。

「……………来たか」

二つの影がアンリの体に消える。

「実験は再び成功。そんでもって、予想は答えとピッタリでした…
…ってところか。よっしゃあ！」

「（。。。）？」

「おう、協力サンキュな？シャル」

「デヘ（*。ー。）＜」

場所はマミのアパートの屋上だった。アンリの周囲には『泥』でその体を構成された様々な種類の動物が佇んでいる。

彼はまたしても実験を行い、自分の予想が当たっていたことで喜び、シャルの頭を撫でていた。

「『魔法』は不完全だったつー事か。そりやそうだなあ？大量のエネルギーは指向性を持って働かせれば『大抵は』望み通りの事が起きる。だが、それにはしっかりとした指向性と使う時期・方向・場所・陣が無けりや望んだ事は簡単なものの以外は絶対に起きねえ。聖杯みたいなもんだ。あれでさえもかつて、アインツベルンが『魔法』を取り戻すために作っただけの手段にすぎねえ」

彼が調べていたのは『魔女は人間で在るか否か』という疑問を明かすため。体と魂の変質はどうなっているのかだ。変異した魔女のシヤル。そして自然に発生した魔女の体と魂を宝具を使って出した自分の一部である泥に喰らった時、消す前に自分へと戻してその魂の感覚を調べ上げた。

その結果は…

「白、だな。……シヤル、喜ぶべきかは知らんがお前まだ『人間らしいぜ?』」

「Σ(。Д;)!!!!」

人間。魂の形が絶望向きになったせいで、その肉体も醜いものになっただけ。本質は人間であり、人間であり続けるからこそ、自身の殺害権限が働いてあっさりと『異形』を殺すことができた。

アンリは魔法少女の真実を聞いた時、魂がソウルジエムというものに変化し、その肉体は魂が砕けない限り回復し続けるのならば、インキュベーターたちは『第三魔法 魂の物質化』を使えるのかと思ったからだ。

だが、第三魔法は『魂そのもの』に命を与えることで不老不死を与え、より高次元の生物へと肉体と魂を昇華させるためのものであり、こんな不完全なものではないと最近思いだした(世界からの電波を受け取った)からだ。

ならば魔女になる前とその後の魂はどうなっているのか?その結果がこれ、『人間のまま』である。

「まあ、魔女の場合はどっちかつーと魂は人間、体は『死徒』みたいなもんか」

「?c(。・*)エート」

「死徒はオレの世界の吸血種の総称みたいなもんだ。それで27祖って奴らの中にはな、オレの速さでは勝てねえ奴ら、第1位と第5位にいる犬と蜘蛛がいるんだよ」

「????(。・*)」

「『速さ』ってのは人殺しの速さな?そんなもって死徒ってのは…」
体が似ているといったのは死徒。いわば吸血鬼のような存在で、上位には『死徒27祖』という者もいる。魔女と共通するのは血を吸った相手を自らの手下とし、いくつかの段階を踏んでそれもまた死徒と成る工程を持つからである。

「…とまあこんなところか。ちなみにさっきの1と5は惑星が選んだ最強種だから勝てるはずもねえ」
アルティメット・ワン

「x(。・*)へエ」

「向こうの鉄塔からなんか変な電波も感じるし、そろそろお開きにするか。そんじゃ戻るぞ…『散開』つと」

「(^^)/ハイ」

待機する全ての動物をどこかへと走らせ、シャルロッテと共に姿を消したアンリ。今日はこれで引きあげたのだった。

休業・人間・解明（後書き）

シャルロット・ステータス

マスター：アンリ・マユ

クラス：キャスター

真名：シャルロット

性別・年齢：女性・？

属性：混沌・中庸

身長：25 cm

体重：2 kg

パラメータ：（ ）内は結界内で強化時 「」内は第二形態（結界内のみ）

筋力・C + (B -) 「B +」

耐久・C (B -) 「B +」

俊敏・C (C +) 「B」

魔力・A (EX) 「EX」

幸運・A (A +) 「D」

宝具・C A ++

クラススキル：キャスター

陣地作成：A

魔術師として有利な陣地を作り上げる技能。“工房”を越える“結界”を形成することが可能である。

道具作成：E

結界内でのみ具現化された魔力を帯びた物質を作ることができる。

保有スキル

お菓子のお城：A

お菓子を作ることができる、無制限に『実体のある』お菓子を作る

『魔法』レベルなので高ランク。なお、チーズ類は作れない。

戦闘続行：A

往生際が悪く、瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。自身の肉体は人から外れているのでとてもタフ。

単独行動：A+

マスター不在でも行動できる能力。元から実体を持つので自分の考えのままに行動できる

自己転生：B+

自身の肉体を全く別の肉体に変化・適応させる能力。元の姿に戻ることも可能。

怪力：C

一時的に筋力を増幅させる、魔物・魔獣が保有する能力。結界内でのみ常時発動し、使用中は筋力を0・8ランク上昇させる（D↓C-）

執着：A

自身の在り方。特定の人物以外からの精神攻撃を無効化する能力。これを打ち破るには保有者への信頼関係を構築するほかない。自分の興味を持ったモノへ依存しやすい。

宝具

『固有結界・お菓子の魔女（Charlotte）』

ランク：A++ 種別：レンジ：最大捕捉：

由来：自身の在り方

展開した結界がそのまま宝具へと昇華された。この固有結界は通常のそれとは異なり、世界からの修正力を受けないので、展開に魔力

を必要としない。

術者が選択した周囲の生物全てを取り込む事ができ、その大きさ・質量を関係を無視することができる。この結界内で命を落とした場合、その人物の魔力は全て術者へと流れ込む。

この結界には『使い魔』という存在が出現し、おもに術者の求める物を探しているが、侵入者を発見すると襲いかかってくる。使い魔は一体一体が全能力ランクEのサーヴァントと同等の戦力を保有する。

結界と外の情報は完全にシャットアウトされ、術者と同じ系統の魂を持つ者しか結界に侵入できない。なお、結界内に存在する物質の物理法則は殆んど無視されている。

常時展開されるべき結界が宝具となったことで、魔女の代名詞ともいえる『絶望』を扱えるようになったため、術者の視界内に限定されるが、前話の様にアンリ・マユ同様『負』を吸収・放出可能となった。

セカンドシフト フォルムチェンジ
『形態移行・自身転生』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ：0 最大捕捉：1人

自身を全く別の肉体に変化させることができる宝具。固有結界を使用したときのみ使用可能な宝具であり、その姿によって若干ステータスの変動もある。

ただし、変化できる姿は一定の概念からは遠ざかることができず、ステータスの変動も元のステータスより±1ランクしかできない。とある形態の時のみ幸運がワンランク減少し、爆裂・熱波系の攻撃が弱点となる。

ステータス高めなのは、原作ほむらの台詞から予想してちよつと強めにしました。マスターのアンリと戦った場合、余裕でシャルロットが勝ちます。

これはサーヴァントとしてスキルが明確になり、霊体化こそできな

いものの、魔力（絶望）供給で大幅に強化されたことにも起因します。それではみなさん、恵方巻きに变身する日をお待ちください。

12/9・11編集：本文・文末変更 追記後書きシャルロット説
明

街角・再怪・左右・噛咬（前書き）

初めてまともに戦闘情景が書けたと思います。どうぞお楽しみくだ
さい。

街角・再怪・左右・嚙咬

夜明けの頃。アンリとシャルは魔女狩りに出ていた。

前回より、マミがしばらくの間は休憩のため、その間の町を二人でしっかりと守るためである。そのためには使い魔一匹逃がす訳にはいかず、シャルのように契約する事も出来ないのだからまだ人間の括りにいたとしても殺さなければいけないと判断したからだ。

彼の元はただの人間であり、英霊と言っても『救うための力』ではなく、『壊すための力』を有しているのだ。ならば、切り捨てるものは切り捨て、足りない力は他人から貸してもらうほかない。切り捨てるそれがまだ人間であつてもだ。

「どうだ、見つかったか？」

「オオン……」

「そうか……次はお前らはこっち。オレらは向こうで探す。……散！」

「「グオオ！！」」

……いくらかのおふざけも、まあ、そのためには仕方ないのだろうか。

「結局は見つからずじまいか……おかしいな？」

「ε＝（「。」「；」）フウ」

その日の昼。

ここまでの間、使い魔さえも見つけることができなかった。大抵の魔女の活動時間は夕暮れから夜明けまでの間であり、シャルのように突然孵化でもしない限り魔女が昼に現れることはほとんどない。

今は太陽が真上に来ており、マミも学校に登校している時間帯である。彼女も今頃はアンリお手製の弁当とシャルロッテ印のお菓子をクラスメイトにおすそ分けしていることだろう。

あくまで魔法少女の仕事を休憩しているだけで、学校に行かない訳ではない。彼女は正史と違い、学校では人気者で友人も多い。今の彼女を覇気つけるためにも友人とのコミュニケーションを大切にしてみたいのだ。

閑話休題。

アンリたちにとってもこの時間帯は休憩時間でもあるので、彼らは適当に町を歩いて一つの人が集まっている、ある場所に到着した。

「こんにちは。あら、可愛いぬいぐるみさんね？アンリさんもこういう一面があったんですか」

「時田さん、どうもです。実はぬいぐるみじゃないんすよ。ほら、シャルロッテ、挨拶」

「（――）ペコリ」

「「「おおー！」「」」

「すっげー兄ちゃん！どうしたのコイツ！」

「オレの村での呪術の一種を使って…そうだな、こっちでは『付喪神』みたいなモンでな？こうして自意識を持たせてみたんだ。つーわけで力もあるし、かなり賢い。これからはコイツもこれからお願いします」

「フッフッフ。いいわよ。それじゃアンリちゃんに続いてこの町のマスコット決定ね！」

「ちょ、町内会長！？何すかマスコットって！」

「実のところ去年から決定してたのよ！ほら、アンリちゃんの様をまねたキーホルダー！！」

「い、いつの間に……」

「……アッハッハッハ！！」「……」（*^_^）ノ＼（^_^-
^*）ナカマ！」

上の人たちは町内会のメンバーであり、その中には、この町に立っているビルの社長から近くの家の住人まで様々であり、その誰もがこの町を思う気持ちであふれる人たちだ。

この数年間アンリが慈善活動をしていた所を見たこの会長が建てた会合で、2年前から結成されている。会議などといった堅苦しい事は無く、一人が町の為にやりたいと思った事を皆でするといったノリで、気のいい人たちがたくさん集まっている。

先程の説明で皆が誰一人疑問を持たなかったのはアンリが最初の会合の折「実際に存在する呪術の発達した村から捨てられた忌み子」と説明をしたからである。それ以来、アンリ頼みで来た人を簡単な

占いや、愚痴を吐きだす心理治療まがいの事が出来る人として受け入れられ、親しまれてきたのだ。

「ハア。それはそうと、最近どうっすか？」

「中々売上が伸びなくてねえ……そうだ！シャルちゃんをモデルに家の会社でマスコットグッズにしてもいいかしら？」

「だとさ、どうする？」

「（*^ ^*）ノイイヨ！」

「ありがとう！それじゃ早速撮らせて貰うわね？あ、アンリちゃんも一緒に！」

「？いいっすけど……」

「それじゃ寄って寄って！…そうそう、そんな感じで！ハイ、チーズ！」

カシャ！

「いい感じにできたわ。ありがとうね？」

「（o*。ー。）oワクワク」

「そんじゃ今日はこれまでっすかねえ。もうこんな時間になったみたいだし。島野さんはこれから老人ホームじゃないですか？」

「お、そうだった！そんじゃアンリ君また」

「バイバイ！」「今度は、マルクナルドで集まりましょうか」「さあ、これから忙しくなるわよ！」「社長。案件の作成しておきました」「それじゃあねー」

「……よかったな」

「（お、い）／＼」

別れの言葉を口々に解散する町内会のメンバー。それぞれが自分の職に戻る中、アンリ達もその場を離れるのであった。

夕方の頃。見滝原中学校、校門前にて

「あ、アンリさん！どしたの？こんなところまで来て」

「美樹ちゃんか、いや実はな……」

そこで説明した。魔法少女の真実と、そのせいでマミはしばらくの間は休暇を取り、その間は自分がその分の魔女を狩る事。魔女になっても魂は人間のままである事などだ。もちろん周りに聞こえないようにしてだ。

「嘘、そんなことって……」

「残念ながら本当だ。わりいが鹿目ちゃんにも言つてくれねえか？」

「うん分かった。伝えておくから。それじゃまたね！」

「白い生物には気をつけろよ！」

「はいはい！」

「つたく、軽いなあ……ちょっと不安だが、大丈夫か？」

そう思っているとママが学校から出てきたようだ。此方の姿を見つけると近くの友達と軽く別れの挨拶をし、駆け寄ってくる。

「ごめんなさい。待ったかしら？」

「いんや。ああ、さつき美樹ちゃんにも『あの事』言つていたから。鹿目ちゃんも大丈夫だろう」

「そう……それじゃ家までお願いね？」

「りょーかい。行きますか」

二人は歩きだした。

実はこの送迎、ママが十分に乗り切れるまでは一度も変身させないためにアンリが出した提案だ。変身すれば魔力を消費し、その分ソウルジェムが黒ずんでマイナス思考になりやすく、せっかくの休憩も無駄になるためである。

「そっぴやママ」

「なにかしら？」

唐突に切り出したアンリ。一体どうしたというのだろうか？少し陰りの見える顔立ちで次を告げた。

「キュウベえだけど。アイツをどうする？」

「……」

それはキュウベえについてだった。インキュベーターのやり方やその目的が分かったのはいいが、これまでの間、マミとアンリは少なからずキュウベえと過ごしてきた。

時にはテレパシーで位置を知らせてくれたり、またある時はちよつとした相談のはけ口として付き合ってくれたこともあり、キュウベえに助けられたことも少なくは無いのだ。もちろん、キュウベえにとっては魔女を狩る事によって彼らのエネルギー収集効率を上げる過程にすぎないのだろう。だが、彼に恩と借りがあり、それを無下にできるほど彼らは冷酷にキュウベえを切り捨てられない。

「出来る事なら……きゅうべえも——」『してあげたいわ……』

「そうか……分かった。そんじゃやってやる」

「え、でもどうやって？キュウベえ達はみんな……」

「ちよいとやり方は荒いが、確実にあいつだけは——」『出来
るだろうよ。それともなんだ？オレは今までマミの言った事を出来
なかった時は在ったか？』

「ふふっ、それもそうね。でも洗濯はどうだったかしら？」

「うえー！い、今はもう出来るからいいだろ！あーもう！昔の事ぶり返しやがって」

「アハハッ！ごめんなさい。でもお願いね？」

「ハイハイ。マスターの言うことはやって見せますよ」

笑う二人。彼らはキュウベえを『——』することに決めたようだ。どういうことになるのかはまた今度である。

そうして家に着いたマミをシャルロッテが出迎えた。アンリが外にいて、マミが家にいる間の守りはシャルに一任してある。元々の魔女としての能力とサーヴァント補正の付属スキルによってシャルは大幅に強化されているからだ。

アンリも当然だが、手練れの魔法少女が2人来てもシャルは倒せないほどの強化を施されていたのだ。

そうして家を後にしたアンリは再び夜の街へと繰り出た。夕暮れ時の学校で美樹さやかとの会話中、今度は色つきの鷲を2体さやかの影に潜ませたので、それぞれ一体ずつが守りにつき、美樹さやかと鹿目まどかの安全は保証されている。今回はアンリ一人での戦闘だ。

マミ達魔法少女とは違い、ソウルジェムを持たないアンリが魔女を搜索するのはかなり骨が折れる。

いつも搜索手段として使っているのが、獣の形の泥。オート操作で命令を実行し、獣という指向性を持たせた形なので泥も殆んど消費せず使い勝手がよいが、今は宝具補助なしの限界数をすでに他の人物への警護に当たらせているゆえ、その身一つで搜索をしなければならぬ。

だが、自分の主の為に、アンリはサーヴァントとしての身体能力をフルに生かし、結界の搜索を行っていた。疲れを知らず、物を損らずとも自分で魔力を生成できる彼は夜の街を走り抜けていた。

「見つけた。かなり不安定だから……これは使い魔の結界か」

そして、結界へと突入した。

少し進むとすぐに使い魔を発見。見た目はおもちゃのプロペラ飛行機におさげの女の子がのった落書きのような姿をしていた。

「発見。っつーかアレってアイツと会った時の奴か？ま、いい。さっさと狩ろう」

そう言つて泥を発動。自律思考を持たせた泥が作れないだけであつて、普通の泥は鞭一本分くらいなら作りだせるので、それを使い魔に命中させ

「待ちな！」

られなかった。当たったと思った瞬間、横から伸びてきた『それは使い魔を弾き飛ばし、別の通路へと吹っ飛ばした。使い魔自身がバリアの様なものを張っていたので、おそらくはノーダメージだろう。』

すぐに追おうとも考えたが、ここに結界がある限り使い魔はすぐに見つかる。ゆえにアンリは声の方へと振り向いた。そこにいたのはいつしかの――

「よう。ひっさしぶりだなあ？会いたかったよ、悪神」

「お前か…随分立派に育ったじゃねえか、『佐倉』？」

凶悪な笑みを張り付けた紅槍の魔法少女。佐倉杏子がそこに佇んでいた。槍を構え、肌に焼けつくような殺気を此方へ飛ばしてきている。

「あいも変わらず使い魔も狩り尽くすってか？もったいないなあ。全世界共通語だぜ？」

「そういうテメエもなかなか曲がった根性が板についたじゃねえか。こんな子に育ってオレは悲しいよ」

「つけ、心にもない事言いやがって。アタシはアンタに育てられた覚えなんざ……」

穂先がアンリを捕える。そのまま槍は

「無いつての！！」

彼目がけて発射された。魔法少女としてずっと戦ってきた熟練の彼女が放った一撃は恐るべきスピードを持つ。紅い槍はそのままアンリへと命中する。

「甘えつつつの」

はずが、たたき落とされる。いつの間にか彼の左手に握られていた歪な剣によつてだ。この数年間続けたおかげか、すっかり自分の普段着として情報を登録されたライダースーツを消し、魔力を覆って自分のありのままの戦闘服を纏った彼が悠然と構えてそこに居た。

「おいおい、結構本気で投げたつてのに弾きやがったよ。おまけに前と違って随分けつたいな恰好じゃねーか」

「こちら伊達や酔狂で英霊なんぞやってねえさ。ついでにこれはオレの本気の戦闘服さね」

「へえ、アタシとやり合おうつか？」

「まあな、こういう雰囲気は大抵がそのまま戦うパターンだ。来るなら先手は譲るぜ？」

「面白いじゃねーか！しっかりと躡けてからアタシの回復台としてヤンよお！！！」

「上等オ！！！」

ダン！と地を蹴る二人。ヒトとヒトの戦いが始まった。

まずは先手。杏子の下段から振り上げた槍がアンリの二の腕を狙う。それをザリチエで受け止め絡ませ、武器を封じてからお返しとばかりにその足を切断しようとした。

「危ない危ない、乙女の足を切るうなんざ随分外道じゃないか！」

「乙女だあ？寝言は寝てから言いやがれ！」

再び刃と刃が交差する。杏子の槍は増え、その手に握る一本と後方から出現する無数の穂先がアンリへと飛来。そのいくつもの刃がアンリを掠り、その肌に傷をつけていくが、ただそれだけ。アンリ自

「んなあつ!?!」

再び出現したアンリの手に握られ、地面に突き立てられたタリウイによって止められる。確かに切ったはずの両腕がまだ健在な事に驚愕し、杏子には一瞬の隙ができた。

「しまっ……って無い!!」

「ヒュー。やる、ねえ!!」

隙に付け込まれ、首を狙った一撃を出現させた槍で弾く。容赦なく首を刈りに来た瞬間にぞっとするが、先の攻防の結果、まだ自分が有利な事は自明の理。そう感じた杏子だったが

「強化開始。第二ラウンドスタートだ」

「んなあ!!?!」

アンリの全身に奔った模様に黒い泥が塗りつぶすように出現した瞬間。アンリの纏う空気が一変する。先ほどよりも一回りパロメータが強化され、アンリの動きは獣の如く変化する。

「シャアッハア!!」

「こん……のお!!」

迅い。最初に杏子を感じた感想がこれだ。拮抗していた先ほどと違い、より獣じみた動きになった彼を捕えるので精一杯になったのである。先ほどまで押していたというのに、その攻防が途端に入れ替わった。

剣線の中。歪な形の短剣は破壊され、その手に握られるたびに、その捻じれ曲がる刃の形を変え、間合いを悟ることが難しい。先ほどもそうであつたのだが、いざ守りに入るとこの上なく厄介な得物であると、杏子は思っていた。

何よりアンリ自身がこの戦闘を楽しみ、格段とその手数と重さを増加させてゆく。

左手の『左齒嚙咬』^{タルウイ}は『熱』の意味を持つ通りに戦いを燃え上がらせ、右手の『右齒嚙咬』^{ザリチエ}は『渴き』の名のままに所有者へ渴きを与え、闘争へと追い立てるのだ。

「クツ、こんの！ままじゃ！！」

疲れを知らない英霊と違い、杏子には疲労が貯まる。打ち付けられる一撃は腕に響き、確実に自身を陥れる。そして

「ハツハア！！！！」

「クソがッ！！！！」

両者渾身の力を込めた一撃。杏子は全ての力を込めた右薙ぎ。アンリは英霊としての全能力を込めて刃を振り上げる。もう何合目かも分からない衝突の結果。

パキーン！！……

武器が碎けた音が聞こえ、決着はついた。

杏子の槍は振り切られた形で、アンリの剣は…その曲がつた刃が杏子の首を捕えた形であつた。杏子の槍は中ほどから碎け、アンリの体には傷一つ付けられていない。

「これでチェックメイトだ。おとなしくしな」

「クツ……アタシも年貢の納め時ってか？」

「ああ？何言ってやがる」

「アタシが居るから取り分が減っちゃう。だから殺そうとしてんだろっ？そんなくらいは分かって——」

「違うつつの。そりゃあさつきは楽しかったが、んな面倒なことはやらねえよ」

「はあ？じゃあコレは一体何だってんだ！」

「ま、このまま聞いてくれや。チヨイと長い話にはなるがな——」

彼女には簡潔に話した。ソウルジェムの真実ともう一つ、協力を呼びかけたのだ。『ワルプルギスの夜』の討伐依頼を。

「ふうーん？ソウルジェムが濁りきったら魔女にねえ……そんなの浄化し続ければいいだけの話じゃないか」

「あーあつまんねえ。もうちょっとリアクションはねえのかよ？」

「この状態でそんなことしたら、頭と胴がオサラバしちまうだろうが」

「それもそうか。で、でっけえ魔女の方のご返事は？」

そう聞き、アンリは剣を離れさせた。杏子は自由になった体をコキ

「コキと鳴らし、返答を返す。」

「ったく。しょーがねえ、乗ってやるよ。その代りと言っちゃあな
んだが」

「なんだ？」

「これからしばらく、お前んとこに世話になるし、穢れの回復役にな
って貰う」

「アア！？オイオイ何の冗談だよ」

「対価としては別にいいだろ？アタシは残念ながら根無し草の身で
ねえ。それとも、アンタはこんな弱い乙女を危険な夜の街に放り
出す趣味でも持ってるのかい？」

「乙女って、それこそ冗談——」

バギイ！とアンリの腹には見事な一撃がヒットした。

「ッヅ、グ……！」

「え？なんだって？もう一回言ってくれるか？」

「す、スンマセン……」

「よろしい。そんじゃ宜しくな？」

いまだ腹を押さえているアンリに杏子はイイ笑顔を向ける。何とか
手で返事をしたアンリはそのまま巴宅まで連れていくのであった。

いつの時代も女性強い。後にアンリはそう語ったという。

「あ、『解』そんでもって『伝』っと」

「ん？何やってんだ」

結局、マミの家までゆつくりと歩いている二人。その途中でアンリが何かを解除し、再び何かを飛ばしたのを見た杏子は尋ねる。

「お前に協力を取り付けられたってのを、ちよいと伝言にな」

「なんだ、アタシ以外にも居るのかい？」

「まあな」

「ふーん。しかし、今さらだけど、ソウルジェムが本体で、この体はゾンビみたいなもんだって？にわかに信じがたいもんだ」

「なら、試すか？大体100メートルぐらい離すと肉体の機能が停止すると思うが…」

「流石にやめとくよ。そこまで確信持ちまったら、もう引き返せない気がするしさ」

「そうかい」

あの激しい戦闘で刃を交えた雰囲気はどこへやら。とはいえど刃を交えた者同士、なにかが心に伝わったのだろうか、すっかり仲が良くなっているのだった。

衝突があり、たがいとその身をすり減らして初めて、人間は相手の歯車とかみ合うことがある。それは人が生きていく中で一度は通る道だ。今回はその例なのかもしれない。

そしてこの後。

杏子を連れて家に着いた時にもひと騒動が起こるのだが、それはまたの話。

残る期限は2週間。その日に最大の運命が覆され、幸せを得られるのかどうかは、まだ決まった訳ではない。

だからこそ、この先を知る時の少女と悪の青年は奔走するのだ。

たとえその身を犠牲にしても

街角・再怪・左右・噛咬（後書き）

がんばれました。十万PV越えたときにはなにかお祝でもしようか
と思います。外伝or閑話的な意味で。先が長い話ですが、次回作
のプロットも大体できたので、この作品が終わった後もこれとど
も、よろしく願います。

ありがとうございました

誘惑・葛藤・回避・答案（前書き）

やっつと書けたー！ー！もうなんか日を置いて書いたのでテンションやら書き方やいろいろおかしいです。
それでは、お楽しみください

誘惑・葛藤・回避・答案

後日、夜間 鹿目宅にて

まどかは自室のベッドで呆然と天井を見上げていた。

さやかからの衝撃の報告、そしてアンリからの伝言動物から『魔法少女体験コース休止』の一報を聞いてから一日が経過した。

尊敬していた人物の事実。自分が憧れた魔法少女の残酷な真実。インキュベーターの目的。これらの事は彼女の心を追い立てるには十分だった。

「ほむらちゃん……………」

もう一人。自らが知る魔法少女の名を知らず内に呟いていた。

彼女はこの事を知っているのだろうか？彼女は初めてその姿を現した時から不思議な雰囲気纏っていた事を思い出す。

もしかしたら彼女が何かを握っているのかもしれない——が、そこまで考えて頭を横に振った。もし彼女が知っていたとしてもずっと黙っている必要性が考えられなかったからだ。

「やあ、元気かい？まどか」

突如自分しかいないはずの部屋に響いた声。驚き声のした方を振り向いた先には

「きゅう、べえ……………」

「そうさ、僕だよ。久しぶりだね」

お菓子の魔女の一件から、すっかり姿を見せなかったキュウベえが

いつのまにか現われていた。

彼は変わらず、愛くるしいぬいぐるみの様な姿だが、事実を知ったからこそ分かる。此方を見つめる紅い瞳にはなんの感情も見いだせない。そこには一種の恐怖さえも覚えた。

それでも彼女は聞かずにはいられない。自分の心が訴えかけるようにして彼女は口を開いていた。

「どうして……」

「？」

「どうしてキュウベえはそんな事を続けるの……？」

言った。聞いてしまった。どくどくと心臓は早鐘を打ち、声も震えていたが、それでも尋ねる事が出来た。

「…なんだ、まどかも知っているのかい。なんでと言われても、やむを得ない事情があり、その結果としてこうなっているだけさ」

「事情？」

「全てはね、この宇宙の寿命を延ばす為なんだよ。君は『エントロピー』という言葉を知っているかい？」

エントロピー。熱力学の第二法則。

エネルギーは変換することにロスが生じ、全体的なエネルギーは減少するという考え方の事だ。

『燃やす為の木を育てるための労力』が『火を燃やした際に生じるエネルギー』と釣り合っていない事が分かりやすい例の一つである。

「僕たちは宇宙の寿命^{エネルギー}を減らさないよう、この法則にとらわれないエネルギーを探し求めてきたんだ」

「……………」

「そして見つけたのが魔法少女の魔力だよ。僕たちの文明は知的生命体の感情をエネルギーに変換する技術^{テクノロジー}を開発したんだ。……ところが生憎、当の僕らが感情というものを持ち合わせていなかったからね。宇宙の様々な異種族の中から君たち人類を見出した」

その先を要約するところだ。

人間の感情は、その一生を生きる間に作るエネルギーをはるかに凌駕していたとの事。人類の魂は『法則』を覆すエネルギーたり得るものであった。

とりわけエネルギー搾取の効率がいいのは『第二次成長期の少女』の希望と絶望の相転移。

つまり、脈動するかのような活力あふれる魂が、絶望に支配される瞬間の転落時、まるで全てを焼き尽くす程の炎が、一瞬で燃え尽きるようにしてエネルギーを発生・放出する。

そうした莫大な、いや絶大なエネルギーを回収し、宇宙の寿命へと還元することが彼らインキュベーターの役割なのだという。

「どうして！！？最初あなたと会った時、そんなことは一言も言わなかったじゃない！！！」

当然まどかは葛藤する。犠牲になっているのは同じ人間。だからこそ、それは人として正しい感情だ。

キュウベえはそれこそ、本当に、ただ『無情』に、その問いに答えた。

「『聞かれなかったから』さ。さっきだってそうだろう？君は僕に『どうして』と訊ねた。だから僕は『質問』に『答えた』だけさ」

「だからって……たくさんの方が死んだりする理由にはならないでしょ！？」

「ホント、君たち人類の価値基準は理解に苦しむなあ。今現在で70億人近く、しかも単純計算で四秒に一〇〇人ずつ増え続けている君たちが、魔女の被害にあつ、ごく少数の単一個体の生き死ににそこまで大騒ぎするんだい？」

あくまでキュウベえ達の考えは効率を重視する。それこそ家畜と飼主の関係のようになだ。

「そんな風に思っているなら、あなた、やっぱり私たちの敵なんだね」

「やれやれ、藪蛇だったかな？……ああ、そうだまどか」

窓から出ようとして立ち止り、キュウベえは言葉を区切った。こちらを振り向き、その感情の無い瞳をまどかへ見据える。

それを受け、多少は怯んだが、まどかは負けじとその目を見つめ返した。

「その中でも君は歴代でも見た事の無いほど、最高の魔法少女ねんりょうの才能を持っているんだ」

「……！！」

「この宇宙の為に死んでくれる気になったら、いつでも僕を呼んで待ってるからね」

そう言い残し、窓の外へと身を翻してキュウベエの姿は消えた。

「……………」

まどかはただ、枕を抱きしめ俯くことしかできなかった。

———そうして時は過ぎて往く。

同日、キュウベエとまどかの対談の続く中、杏子を連れ帰った巴家はというところ……

「ああ……あなたこの前の魔法少女マジカルガールじゃない！ちょっと、アンリ！どうして彼女がここに居るの！？」

「そりゃあこっちの台詞だ。まさかコイツと一緒に住んでると思わなかったよ。アンタそういう趣味でも持ってるのかい？」

「笑えねえからな？冗談にしては随分ヘヴィだからな？」

「わーってるよホントにただの冗談だから、掴み掛かん息が苦しい」

「まったく調子のいいこって、……ここに世話になるなら家主に挨拶ぐ

らしいとけ」

「ま、そういうわけだ。アタシは佐倉杏子だ。これからよろしくな？」

そういつて挑発気味に笑いかけながら挨拶をした。

マミの方は二人がここに来るまでに、アンリからの念話で『討伐の協力者を拾った』としか聞かされていないので、当然ながらこの事を知らない。

ましてや連れてきた相手がアンリ不在の期間中に魔法少女の在り方で意見が合わず、対立した相手だというのだからなおの事タチが悪い。

「と・に・か・く、どういう心変わりかしら？あれだけ効率重視で周囲の被害を考えなかったあなた……いえ、佐倉さんがワルプルギス討伐に出ようだなんて」

「コイツが居るからに決まってるだろ？コイツさえいれば魔女なんざ狩らずともソウルジェムを使わずに済むし、さらには衣・食・住を提供してくれんだ。しかもデカイ魔女一匹殺るだけでこんな好条件が突いてくるときだ。それに乗らない手は無いだろ？」

「ハア……呆れた。あなた、どこまでも自己中心的なのね。アンリ！本当に彼女が協力者で大丈夫なの？」

「実力のほどは申し分ねえさ。ま、少しの辛抱だ。ワルプルギスの夜をブツ飛ばすまでの期間だけここにいるだけだ。まあ押さえられると助かる。そんじゃ、ちょっと寢室を整えてくるから後は頼んだ」

ひらひらと手を振って退出したアンリを見て、またマミはため息を吐いた。

最近アンリが自由すぎではないだろうか？今まで忘れていたがアンリはサーヴァント^{従者}なのだ。令呪でも使って「私の言う事を聞きなさい」とでも命令してやるうか？という考えが一瞬、頭をよぎる。が

（それでも結局、アンリはみんなのために動いてくれるばかりだものね）

いままでのアンリの行動でほとんどが良好い結果に向かっていた事を思い出し、その考えを捨てた。

「仕方ないわね…佐倉さんはその左の部屋を使いなさい。…それから、シャルーー!!」

「・・・（＊。・）ハイ」

そうマミが呼ぶと台所からチーズを口にくわえたシャルロットが駆け寄ってきた。

「うわっ！なんだコイツ!？」

「シャルは私たちが留守の間、佐倉さんの見張りをお願い。何か悪いことしようとしたらガブツとしてもいいからね?」

「（＊・・・）ズリヨウカイ♪」

「ハア？ちょっと待てコイツが監視って……いや、それよりどうやって噛み付く、」

「(。o<■ ■。■)(o/ ゴボツ」

「は?」

突如シャルロッテの口からは、恵方巻きのような体と鋭い牙を覗かせる口を持ったナニカがとび出てきた。その巨体は部屋を埋めるほどであり、その口は突然の事で硬直している杏子の頭をすっぽりと覆っていた。

「こら!ここで大きくなっちゃだめでしょ。早く戻りなさい」

「(*——)ゴメンナサイ」

マミが叱ると再び元のぬいぐるみの様な姿に戻るシャル。先ほどの変貌ぶりに驚くことしかできない杏子はかなりもっている。

「な、なななななんだ今のお!!つつかコイツが何なんだ!!」

「この子はシャルロッテ。現在はアンリの使い魔兼魔女をやつてゐるわ。そういうわけだから、これから宜しくしてやって頂戴ね」

「、(*)ヨロシウ」

「魔女オ!!?」

こうして彼女達の談話は続いて言った。すぐに杏子へ多少の説明がなされたが、それを聞いて杏子はさらに呆れ果てたらしい。

その後はマミとシャルの杏子イジリが始まり、アンリが寝室の準備と明日の予定を練って戻ってくるまで散々な目にあつたとか。「マミも中々黒くなったものだ。」と言ってしみじみとアンリはマミの

成長を喜んでいたらしい。

「ぜんっぜん！！喜ばしくねえから！！！」

……約一人、報われぬものもいるようだが、まあ。

——あとは時間が解決してくれるだろう……

翌日。

「いつてきまーす！」

「危なくなったらすぐシャルに任せろよー！」

「ええ、大丈夫ー！！！」

今日は一日、取り逃した使い魔は分体に任せ、今日は休憩のつもりなのでシャルをバッグに忍ばせておいた。いざという時の最終防衛手段である。

こんないつもの朝と違うのは……

「つたく、後もうちょいでアレが来るつてのに随分とのんきだな？」

昨日、新たに戦線に加わった杏子の姿だろう。

彼女はやむにやまれぬ事情があり、小学校中退というなんともいえ

ぬ経歴を持っている。それもとあるワケがあるが……いや、ここではそう深くは語るまい。

「何ならお前も遅くはねえ。オレが勉強見てやらんことも無いぞ?」

「ジョーダン。アタシはもうしばらくこのまま気楽に生きるさ」

「ハッ、そうかよ。まあ、ご教授願いたいときはいつでも言いな」

それとなく勉学の話振ってみたが見事にあしらわれたようだ。薄く笑いながら肩をすくめて見せるアンリはどこまでも人間くさかった。

マミの見送りを終え、リビングへ戻った矢先、杏子がある事に気付いた。

それは――

「なあ、ところでよ」

「ん?何だ」

「なんでアンタは、いつも他人のための事ばかりしてるんだい?少なくともアタシが見た中じゃ、アンタはいつでも自分の為に動いてるところを見たことがないんだけど」

「オレが?……そうか、そうだったか!ハーツハハハ!……そうだそうだ、そうだったなあ!」

「お、おい!」

アンリはそれを聞き、何かを思い出し笑いだした。その何かを懐か

しむような表情になり、どつかと座った。

そのカーペットの上で天井を仰ぎ、両手で体を支えて形になる。

「ま、座れ。オマエになら話しても面白そうだ」

「まったく、なんだってんだ・・・ま、アンタの事だ。ツマラナイ話じゃないんだろ？」

「まあな、ちよつとした昔話だが……聞くか？」

「ま、これからは暇だし聞かせて貰うとするさ」

「それじゃ、話そうかね。・・・英霊つてのはその人物の死後、伝承として語られたことでその話を元にして神格化された人間や物語の人物だつて事は知ってるな？」

「キユウベえから少しは聞いている。で、それがどうしたって？」

「オレも元はただの人間だつたんだよ。しかも『現代』の、な」

「ハア！！？けど、アンタの名前は」

「そう。アンリ・マユ。ゾロアスター教の最高神と対立する悪神であり、遙か昔の宗教のもんだ。けどな？オレはそんな高貴な存在でもねえし、悪神そのものでもねえ。」

「そんなオレだが、生前はとても不幸だつたんだ。」

「不幸？そんな程度で神と同列の存在になるなんて……」

「普通に無理だ。けどな？その原因がその『神』。しかも限りな

く存在する、全ての世界の魂を管理するほどの最高クラスの奴が関わっていたとすればどうだ？」

「待てよ……それじゃまさか！」

「その通り。原因はソイツのせいであり、オレはソイツとであった。そこでオレは変わった……いや、変えて貰ったんだ」

この先はご存じの通りだ。彼はこの力を手に入れ、この世界に落ち、そしてマミと出会った。キュウベえと会い、まどかやさやかと知り合い、杏子と対峙した。

生前では味わえなかった幸福を、この新たな体に浴び続けたのだ。そうするうちに、いつしか考えるようになったのだ。

「『この幸せを壊さないためにもオレが全部背負ってやる』ってな」

彼はこの世界を壊したくなかった。それが危機に陥るのなら当然だ。自分が『戦って打ち破る事の出来る脅威』と戦い、なるべく人を守るために自分ができる事をしたかったのだ。

そのため自分は『悪そのもの』ではなく、『悪を背負う』事を続けるのである。

たとえその世界に居続けることはできなくともだ。

「まさか、死ぬ、つもりじゃねえだろうな……？」

「それこそまさかだ……でも、ま、消えるかもしれないな」

「消えるって……っ、マミはどうするつもりだよ！」

「マミにはすでに言っている。そしたらアイツ、なんて言ったと思

う？

『それじゃあ、私が死んだらあなたの元へ行くわ。契約の絆はあ
るんだから、それを辿ってでも追いついてあげるから覚悟しなさい
ね？』だよ。まったく、遅しいこった」

そう言つて穏やかな笑みを浮かべた。

——所詮、自分は異邦者だ。受け入れられても、自分が異邦であ
ると思う限り、いつかはその場所を去らねばならない。だが、そん
な自分について来てくれるというのだ。
これが何とうれしい事だろうか。

「でも、そんな事ホントに出来んのか？」

「できるさ。人間はいつだって最悪の状況を乗り越えられたんだ。
世界の壁如きに止められるものじゃないってな。…ま、シャルもつ
いてくるだろうな」

「へえー、マミも中々。って、ん？そうするとこの町はどうすんだ
よ？アイツが居なくなるとしたら、魔法少女になる奴はしばらくい
ないだろうし、ワルプルギスの夜なんてデカブツが来たここで狩る
もの好きなんて……」

「ま、そこはお前に任せるさ。この町は頼んだぜ？」

「ハアア……やっぱそうなるわな。でもアタシに任せるってことは、
好きにしてもいいってことになんのか？」

「そのあたりは、後々考えるさ」

「そんな事だろうと思ったよ。ま、アンタが消えちまうんなら、い

い稼ぎ場を陣取つとくのも重要か」

そう言うのと立ち上がり、杏子は外へと向かう。

「ちょいと長話を聞いて疲れちゃった。外の空気を吸ってくるだけさ」

「普通は逆だと思うが……。ああ、一応持っていけ。小遣い程度にやるよ。……夕暮れには戻ってこいよ」

「お、サンキュー。そんじゃあな」

言い残して退出。それを見送ってアンリは一人となった。

「……っハ、なーんで話したんだろうなあ？まあいい。一応張らせとくかね」

そう一人ごちて、監視兼使い魔掃討の分体を放つ。そして部屋の掃除を始めるのだった。

それから時間が過ぎ、太陽は真上に差し掛かる頃となる。

街を歩く杏子の手にはスナック菓子があった。どうやら渡された駄賃で買ったらしい。

それからしばらく進み、噴水が中央にある公園にたどり着いた。今

はまだ昼の為、まだ保育園や幼稚園に入る前の幼児を連れ添ったママさんたちがちらほらという程度だ。

まっすぐに噴水の近くにあるベンチに腰をおろし、スナック片手にポーッと空を見上げる。

「『幸せ』かあ……アイツはなーんて馬鹿な事、考えてんだろぅなあ」

アンリが提唱した『幸せを守る』。

それは綺麗な理想に聞こえるが、その実、欠点だらけのたわごとと同義だ。その覚悟が現れているのは、あくまでアンリが守れるのは物理的な被害であって、精神的なものまでのカバーはできないと公言しているようなものである。

「その辺考えてんのかよアイツ……でも、考えてんだろぅな。意外とぬかりないし、いつでも余裕そうだしな」

杏子から見た彼はいつでも自然体だった。多少のボケに動揺はするが、それも一瞬の事。

昨日戦った時でもそうだ。高速で槍を投げて、無数の刃に襲われていても、腕を落とされても、常に笑みを浮かべていた。しかも狂気や威嚇ではなく、単純に楽しそうな笑み。見る者がみな安心できるような笑みだ。

「なのに、惹きつけてそれで終わりってか？人の笑顔をみりゃそれで満足ってか？アタシにはちよつと、わかんねえよ……」

杏子の足元にはいつの間にか黒犬が座っていた。おそらくは彼の使いだろうと当たりをつける。

「ちょっと疲れたな……。これ、アンタにやるから、寝てる、間は頼ん、だ」

「ウオン」

了解！と言わんばかりにひと鳴き。それを見た杏子はゆっくりと目を閉じ、暖かな光を浴びながら眠りに着いたのだった。

「ウオン！オン！」

「ん、なんだ。もう夕方か…？」

ひと眠りしたおかげで気持ちもすっきりした杏子は、例の黒犬の鳴く声で目を覚ました。
だあがあたりは――

「あっちゃー、もう真っ暗じゃんか。こりゃあ戻ったら大目玉かね？」

すっかり暗くなっている。頭上には夜空の星が瞬き、杏子の寝ていたベンチには近くの街灯の明かりが照らしていた。

「ま、落ち着いたしさっさと帰ろうか、なっとお……………ん？」

ふらりと歩き出した杏子の視界の先にはこの闇の中でも映える青い髪を持つ人物ともう一人が見えた。その持ち主が着ている服は少し、見覚えがある。

「ありゃあ、マミのこのガッコーの制服か……？こんな時間までお熱い事」

少し興味があつた杏子はその二人をつけて見ることにした。黒犬は何も言わなかったのでそのまま二人を追う。その先にあつたのはとても豪勢な屋敷だった。

「こりゃまたご立派な家だねえ。さしずめおぼっちゃまってどこかい？」

「！！！」

青紙の少女が男を見送るように別れた後、杏子はほんの興味心から話しかけていた。いつもなら氣にとめることも無かつただろう。

「あ、あなた誰よ……」

「野次馬Aとでも言うっておこうか？」

「ちょっと！ふざけてんの！？……て、あれ？その変な感じの犬、もしかしてアンリさんの……」

「何だ、アイツを知ってんのか？」

「ってことは、あなた魔法少女なの？」

「およ、正解さ。なんで知ってんのか知らないけど、この時間にもなると魔女も出てくる。そろそろ気をつけた方がいいんじゃないかい？」

「ご心配どーも！近くに來るでつかい魔女倒すの手伝ってくれるんでしょ？あたしは何にも出來ないけど、頑張つてね！それじゃ機会があつたらまた会おう！なんちゃって」

彼の關係者らしき少女は、そうおどけて駆け足で走つて行つた。杏子は、夜の闇に吞まれ、彼女の姿が見えなくなるまでそちらを見続けていた。

「頑張れか……久しぶりに聞いたねえ。中々嬉しいもんじゃないか？……さてと、アタシも戻ろうか」

彼女もまた歸路についた。心には、ほんの少しの温かみを感じながら。

無論、家で待つていたのは暖かいご飯だけでなく、マミからの説教もあつた事をここに記しておこう。

誘惑・葛藤・回避・答案（後書き）

考查に課題に進路。もういろいろなものあきらめてこれ書きあげました。

最近きつすぎる……

今回、最後の方で上条君が夜遅くに帰宅したのは描写されてませんが、見事復帰を果たしたお祝いとして彼女と街を回ることにしたからです。とか言ってみる。

あと、杏子の扱い悪い気がします。決して嫌いなわけではありません。何というか、さやかはもう魔法少女にならないからその分彼女には『安定』を魅せてもら王的な？まあそんな感じです。

以下、クラス名を考えてみた。

さやか：セイバー まどか：アーチャー

杏子：ランサー マミ：ライダー

ほむら：アサシン

バーサーカーとキャスターいないのは、まあ、ねえ？

……あ、今気付いたが今回メインキャラほとんど出てんのにはほむらだけいねー（ry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4512y/>

魔法少女と悪を背負った者

2011年12月16日18時58分発行